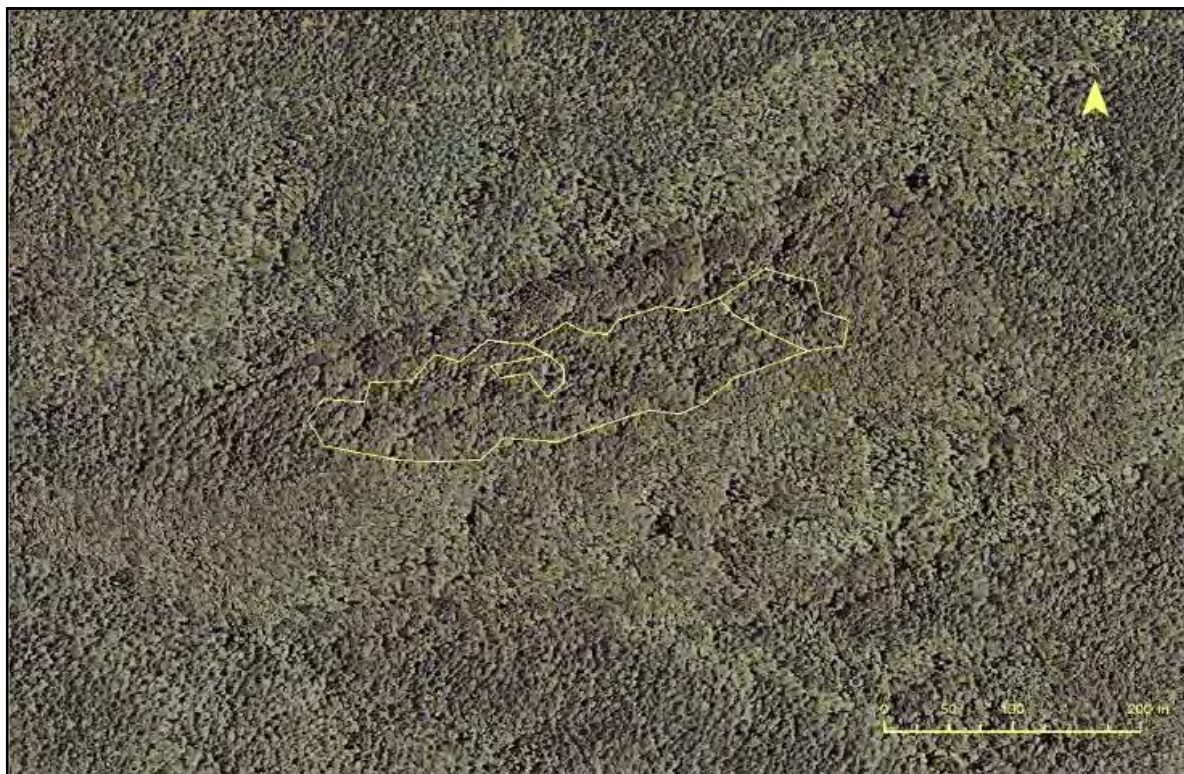
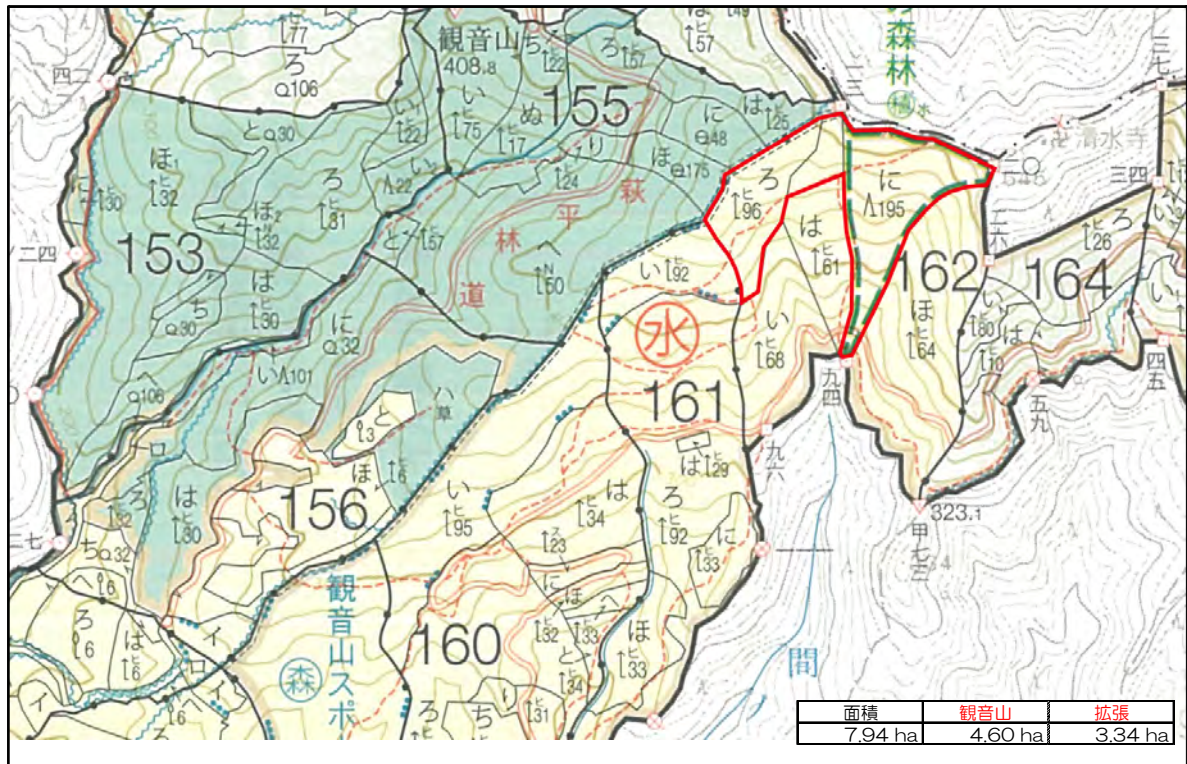


■ 迦葉山天然ヒバ 植物群落保護林



■ 観音山の森林 植物群落保護林



## 観音山の森林植物群落保護林について 補足資料

株式会社公害技術センター

### (1) 位置及び地質

観音山国有林は静岡県浜松市北区の下の地図の赤丸で示したところに所在する。



図1 静岡県浜松市天竜区・浜北区・北区周辺の地図 国土地理院標準地図(20万分の1)

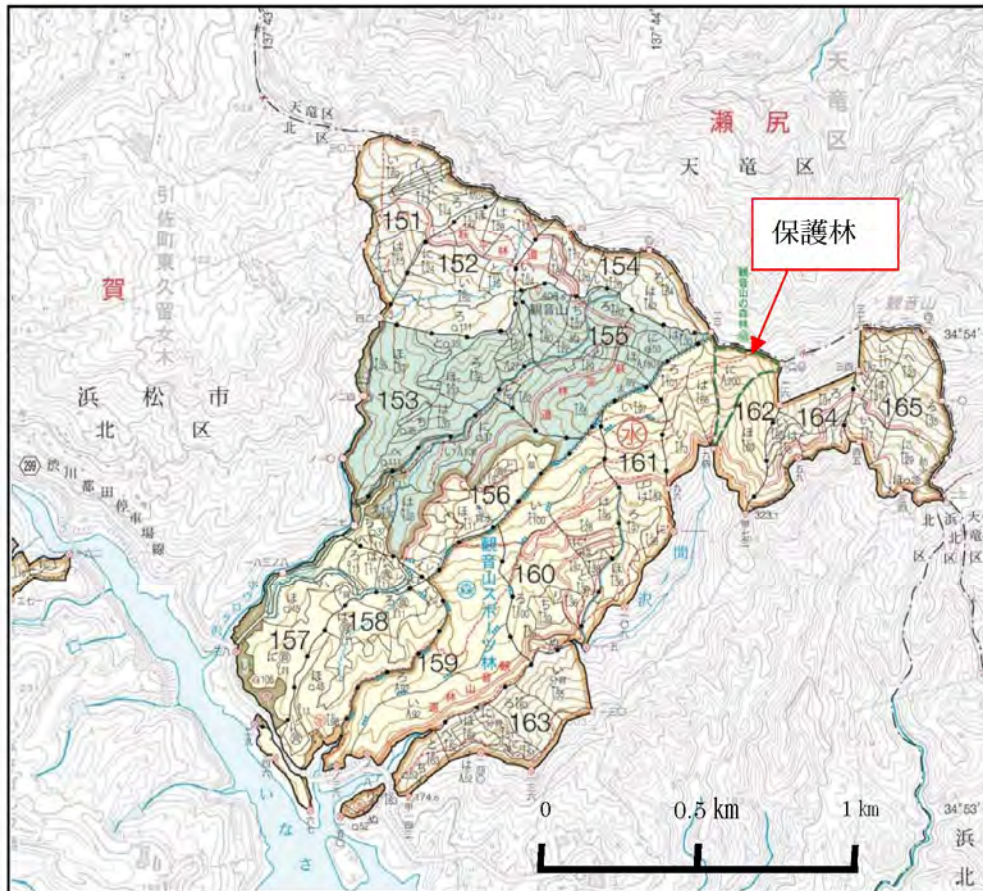


図2 国有林 林班図

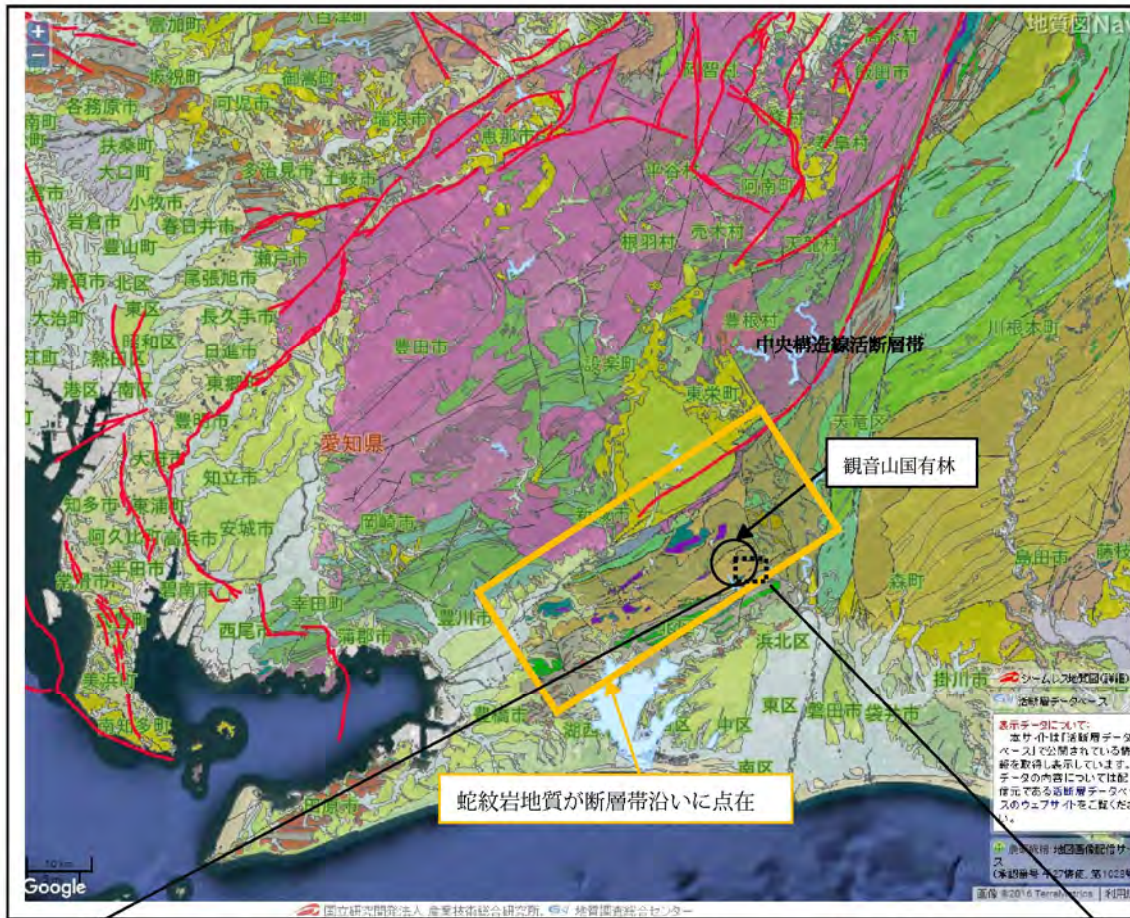


図3 地質図 NAVI より シームレス地質図 中部圏南部 20 万分の 1

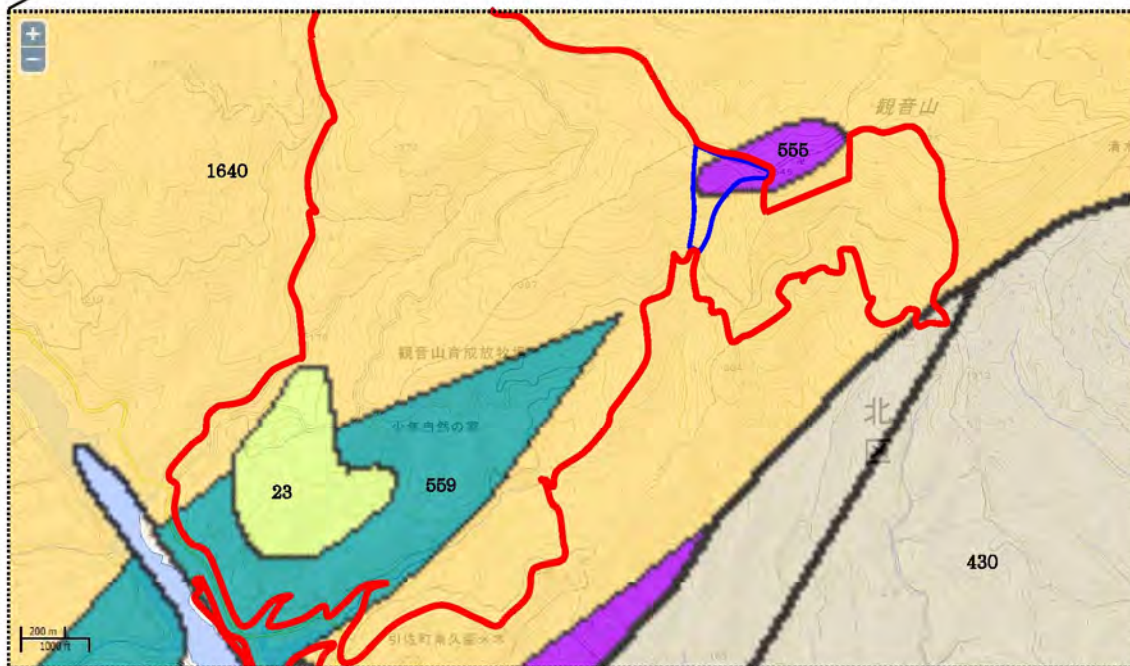


図4 観音山国有林と周辺の地質図拡大 (赤線で囲われた部分が国有林、青線で囲われた部分が保護林)  
(出典：国立研究開発法人 産業技術総合研究所 / 地質調査総合センター)

表1 観音山国有林と周辺の地質図の地質凡例

| 凡例番号 | 説明   |
|------|--|
| 23   | 後期更新世の中位段丘堆積物<br>川沿いのやや高い所に分布している約15万年前～7万年前に形成された段丘層                  |
| 430  | 前・後期ジュラ紀の付加コンプレックスの基質<br>約2億年前～1億4600万年前に海溝で複雑に変形した地層(付加体)             |
| 655  | 超苦鉄質岩類(超塩基性岩：蛇紋岩：オフィオライト)<br>時代未詳の超苦鉄質岩類(蛇紋岩など)                        |
| 559  | ジュラ紀の苦鉄質深成岩類(付加コンプレックス中の岩体)<br>約2億万年前～1億4600万年前の付加体中の斑れい岩類             |
| 1640 | 御荷鉾緑色岩類(苦鉄質岩部)<br>約1億2000万年前～6000万年前に地下深くのかなり強い圧力で形成された玄武岩起源の変成岩類(御荷鉾) |

観音山国有林は、弱く変成された斑れい岩や玄武岩の火山岩・火山砕屑岩、蛇紋岩などからなる地帯に属している。そのため、県立観音山少年自然の家がある観音山森林スポーツ林には苦鉄質深成岩類、保護林の斜面上部には超苦鉄質岩類がみられる。

この保護林の斜面上部の超苦鉄質岩類の地質には、蛇紋岩が存在する。蛇紋岩は、カンラン石と水から蛇紋石と磁鉄鉱が生成される反応、いわゆる蛇紋岩化作用によってできた岩石である。この蛇紋岩は蛇紋石のほかに、植物に障害を与えることがあるニッケルを含んでいる。また、蛇紋岩はマグネシウムを多量に含む岩石である。その多量のマグネシウムにより植物の水分吸収能力が低下するため、低地の蛇紋岩地帯では、貧弱なアカマツ林、若しくは、ツツジ類が有占する低木群落になることが多い。この蛇紋岩には風化作用を受けやすく、もろくて崩れやすいという性質もある。そのため、蛇紋岩で形成された地域は地すべり地帯となることもある。

現在の観音山の森林植生保護林の上部は地質図上も蛇紋岩植生となっており、100年を超える林齢の植林地でも、アカマツを中心とした貧弱な森林となっている。さらに詳細な地質図を見ると、蛇紋岩地質の分布が分かる。現場においては、156及び155林班と160、161林班の間の尾根部を中心に地質図のような大きなまとまり以外に蛇紋岩地質が散在していると考えられた。

| 既設区分    | 名称             | 面積 (ha) | 設定目的                | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称 |
|---------|----------------|---------|---------------------|--|---|-----------|
| 植物群落保護林 | 光徳ハルニシ<br>こうとく | 3.69    | ハルニシ群生地を保護するため設定する。 | 逆川の土砂が堆積した氾濫原にハルニシの純林が分布している。高木層は高さ32m、胸高直径20-90cm程度（最大はハルニシ）。 | 光徳ハルニシ植物群落保護林は、ハルニシの優占する天然林の保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①大径木を含むハルニシの純林から学術的にも貴重な個体群を保護対象としているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。<br><br>■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の東側、南側、および、西側に接する区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。 | 保留        |

区域の拡張

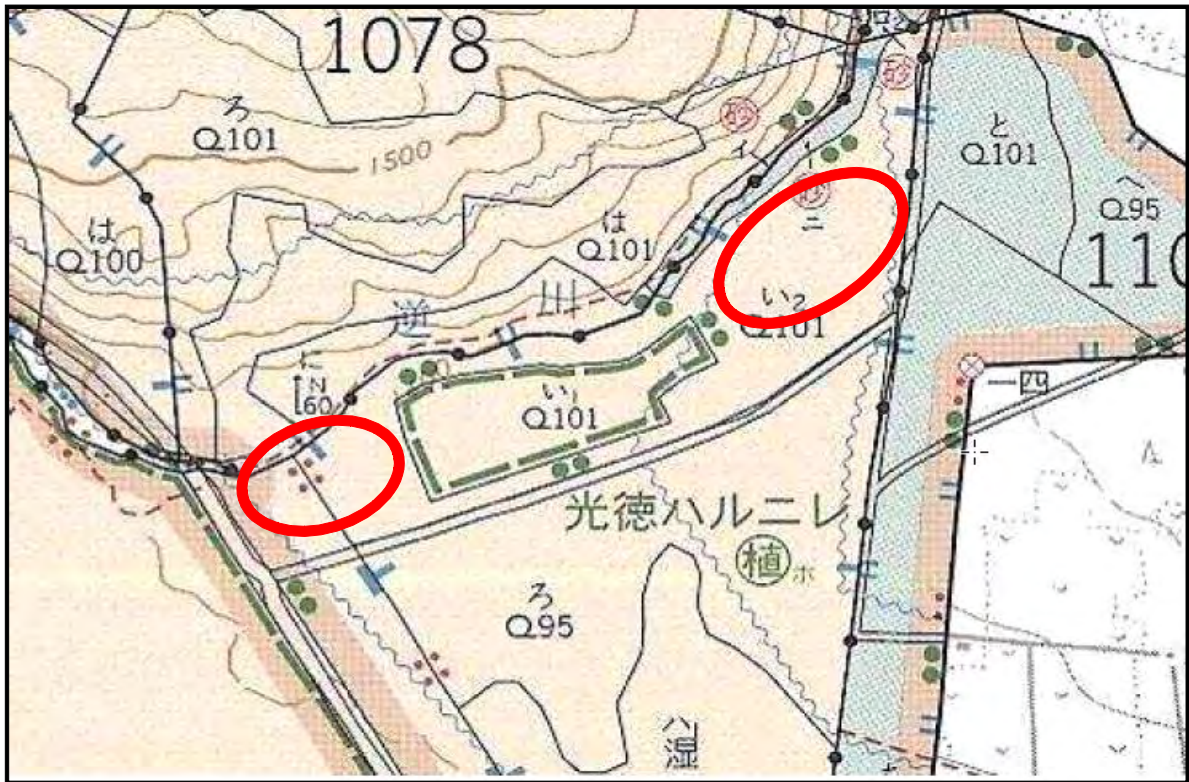
|   |                        |
|---|------------------------|
| 光徳ハルニシ植物群落保護林は、ハルニシの優占する天然林の保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①大径木を含むハルニシの純林から学術的にも貴重な個体群を保護対象としているため、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。<br><br>■今後の検討事項：保護林区域の拡張。保護林の東側、南側、および、西側の自然維持タイプの国有林を保護林に取り込む。【添付図参照】 | 希少個体群保護林<br>新名称：光徳ハルニシ |
|---|------------------------|

| 既設区分    | 名称           | 面積 (ha) | 設定目的               | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称 |
|---------|--------------|---------|--------------------|---|---|-----------|
| 植物群落保護林 | 滝天然サワラ<br>たき | 0.49    | 天然サワラ林を保護するため設定する。 | 胸高直径20-40cmのサワラが優占する林相にある。サワラは中齢木が多く、密度が高いため、今後も進んでいくと考えられる種内競争による淘汰の段階で、伏状更新等の更新が行われていく可能性もあると考えられる。 | 滝天然サワラ植物群落保護林は、面積は僅かではあるものの、①当局内で天然サワラの純林が認められる場所は唯一でその希少性は高く評価されるため、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。このため、保留扱いとする。<br><br>■今後の検討課題：①保護林区域の検討。周辺に一体的な保全が必要な林分が存在するか確認するとともに、北側に位置する八幡岳周辺冷温帯ブナ・ミズナラ植物群落保護林との一体的な保全の必要性を検討する。 | 保留        |

区域の拡張

|   |                      |
|---|----------------------|
| 滝天然サワラ植物群落保護林は、面積は僅かではあるものの、①当局内で天然サワラの純林が認められる場所は唯一でその希少性は高く評価されるため、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。<br><br>■今後の検討事項：保護林区域の拡張。保護林を取り巻く周囲の自然維持タイプの国有林を保護林に取り込む。【添付図参照】 | 希少個体群保護林<br>新名称：滝サワラ |
|---|----------------------|

■ 光徳ハルニレ 植物群落保護林



■ 滝天然サワラ植物群落保護林





| 既設区分    | 名称                 | 面積 (ha) | 設定目的  | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称 |
|---------|--------------------|---------|---|--|--|-----------|
| 植物群落保護林 | 長九郎シヤクナゲ<br>ちょうくろう | 2.65    | 長九郎山頂部にあり、ホンシヤクナゲの亜種にあたるキョウマルシヤクナゲの群落で貴重なものであり、これを保護するため設定する。 | キョウマルシヤクナゲは保護林内の尾根部を中心に分布している。キョウマルシヤクナゲが多く生育している場所も上層はアカガシを主とする常緑広葉樹に覆われており、かなり被圧された状況下に置かれていると考えられる。さらには、林内においても、他の常緑広葉樹と競合しており、林下においては、シカによる食害も見られて、稚樹・実生も少ないのが現状である。このため、次世代を担うキョウマルシヤクナゲの生育は停滞しているものと評価される。実生は露岩や朽木上の苔むした場所に限られ、その数は少なく、稚樹はほとんど見られない。山頂の説明看板からは人為的な影響によってシヤクナゲが減少しているとあるが、上層木の被圧やシカによる食害も大きいと考えられる。 | 長九郎シヤクナゲ植物群落保護林は、ホンシヤクナゲの亜種にあたるキョウマルシヤクナゲの保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①局内で類を見ない特徴的な保護林であり、学術的にも貴重な保護林であるため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。<br><br>■今後の検討課題：①保護林区域の検討。キョウマルシヤクナゲの生育立地である尾根部に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。②維持管理対策の必要性を検討。 | 保留        |

区域の拡張

|   |                          |
|---|--------------------------|
| 長九郎シヤクナゲ植物群落保護林は、ホンシヤクナゲの亜種にあたるキョウマルシヤクナゲの保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、①局内で類を見ない特徴的な保護林であり、学術的にも貴重な保護林であるため廃止せず、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。<br><br>■今後の検討事項：保護林区域の拡張。キョウマルシヤクナゲの生育立地である尾根部を主体に保護林区域を拡張する。【添付図参照】<br><br>■今後の検討課題：維持管理対策の実施。上層を覆うアラカシ等の常緑広葉樹を間伐し、林内で競合しているアセビなどの常緑広葉樹を間引くなどして、キョウマルシヤクナゲの開花結実を促進させる対策の実施が急務。 | 希少個体群保護林<br>新名称：長九郎シヤクナゲ |
|---|--------------------------|

| 既設区分    | 名称           | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称 |
|---------|--------------|---------|--|---|--|-----------|
| 植物群落保護林 | 法師ネズコ<br>ほうし | 3.47    | 原生林に準ずべき森林（クロベ（ネズコ）、コメツガの純林で、この地方には珍しい林相を有する）で、学術及び森林施業上の考証として貴重なため設定する。 | 赤沢山の北側の稜線から延びる尾根上にあり、北～北東側斜面に面している。主たる樹種はコメツガ、クロベ（ネズコ）、フナ、ミスナラ、その他広葉樹で、樹齢101年以上の天然林。チシマザサフナ群団、アカミノイヌツゲークロベ群団が確認され、周辺はチシマザサフナ群団の他、カラマツ植林が分布する。高木層は高さ16～20m、胸高直径40-101cm（最大はクロベ）程度。なお、保護林の周辺は、落葉広葉樹林が主体をなしているものの、一部の尾根には、クロベ等の生育が認められる。 | 法師ネズコ植物群落保護林は、当該地域には珍しいクロベやコメツガの生育する天然林の保護を目的とした保護林である。5haの面積要件は満たしていないが、管内にクロベ群落は少なく、①本保護林は中齢から老齢級のクロベが多く生育し、良好な状態にあるため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。<br><br>■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林に隣接する南西側区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。 | 保留        |

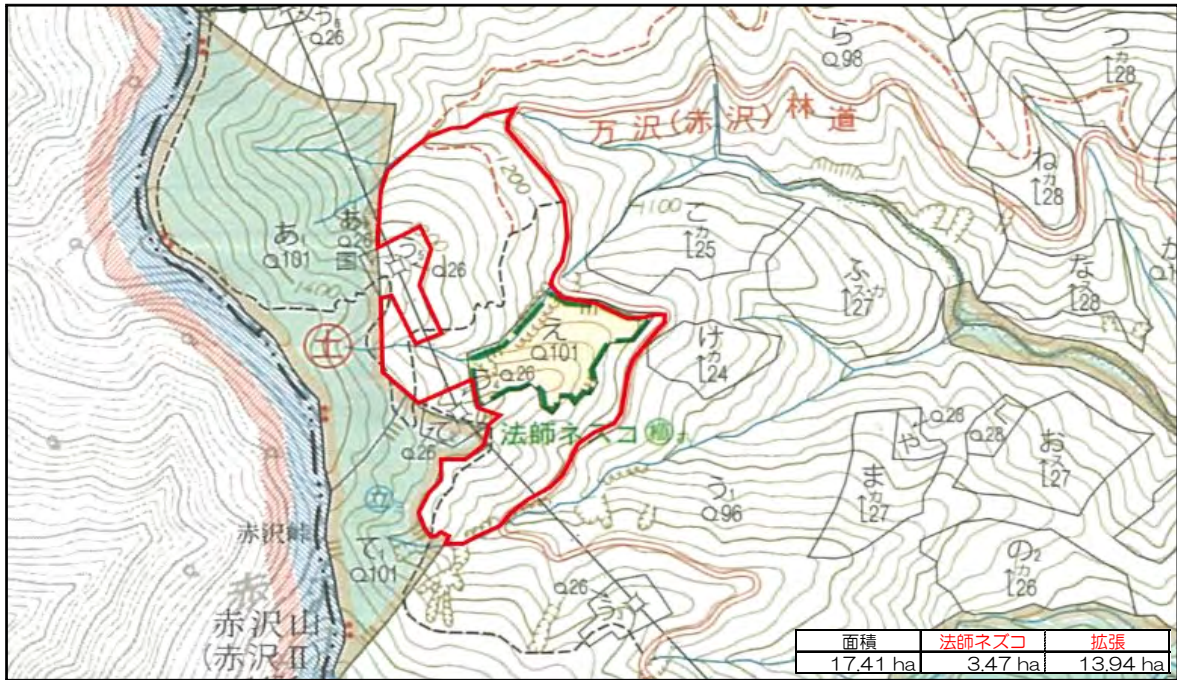
区域の拡張

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 法師ネズコ植物群落保護林は、当該地域には珍しいクロベやコメツガの生育する天然林の保護を目的とした保護林である。5haの面積要件は満たしていないが、管内にクロベ群落は少なく、①本保護林は中齢から老齢級のクロベが多く生育し、良好な状態にある。また、保護林の周辺は、落葉広葉樹林が主体をなしているものの、一部の尾根には、クロベ等の生育が認められる。このため、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。<br><br>■検討事項：①保護林区域の拡張。保護林に隣接する南西側区域を拡す。【添付図参照】 | 希少個体群保護林<br>新名称：法師クロベ |
|---|-----------------------|

■ 長九郎シャクナゲ 植物群落保護林



■ 法師ネズコ 植物群落保護林



| 既設区分    | 名称                   | 面積 (ha) | 設定目的  | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称 |
|---------|----------------------|---------|---|---|---|-----------|
| 植物群落保護林 | 本坂峠のヤブツバキ<br>ほんざかとうげ | 1.60    | 林齢200年以上に及ぶヤブツバキが群生しており、学術上貴重であり、これを保護するため設定する。 | 本保護林は、アカガシ、ウラシロガシ、スタジイ、タブノキなどの常緑樹が優占する林相にあり、林内の亜高木層や低木層にヤブツバキが生育する状態にある。ヤブツバキの実生個体、後継個体は少ない。なお、保護林に隣接する南道側には、ヤブツバキを含む常緑広葉樹林が分布している。 | 本坂峠のヤブツバキ植物群落保護林は、①林齢200年以上に及ぶヤブツバキが群生しており、学術上貴重であり、これを保護するため設定している。5ha未満であるが、林齢200年以上に及ぶヤブツバキ群落は学術上貴重なため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。<br>■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林に隣接する南東側区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。 | 保留        |

区域の拡張

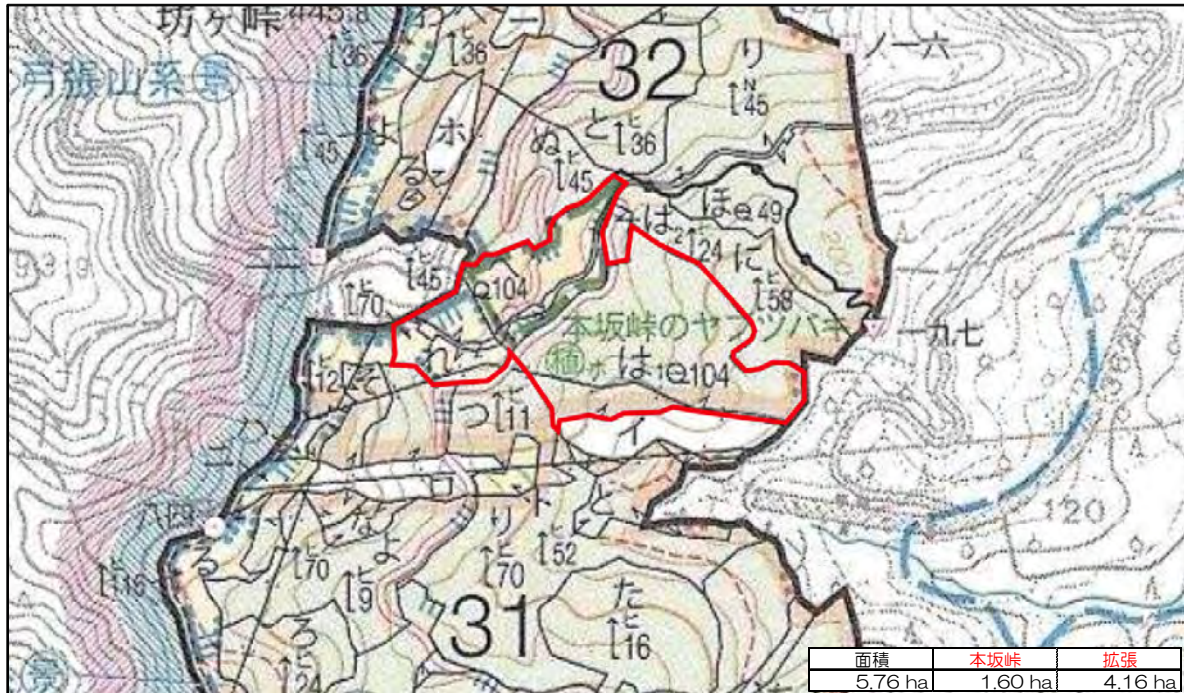
|  |                          |
|--|--------------------------|
| 本坂峠のヤブツバキ植物群落保護林は、①林齢200年以上に及ぶヤブツバキが群生しており、学術上貴重であり、これを保護するため設定しているが、5ha未満であり、希少個体群保護林の面積要件を満たしていない。しかしながら、保護林に隣接する南道側には、ヤブツバキを含む常緑広葉樹林が分布しているため、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。<br>■検討事項：①保護林区域の拡張。保護林に隣接する南東側区域を拡張する。【添付図参照】 | 希少個体群保護林<br>新名称：本坂峠ヤブツバキ |
|--|--------------------------|

| 既設区分    | 名称           | 面積 (ha) | 設定目的                | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称 |
|---------|--------------|---------|---------------------|--|--|-----------|
| 植物群落保護林 | 増沢モミ<br>ますざわ | 3.90    | 天然生モミ群落を保護するため設定する。 | 次世代の低木や実生は少ないものの、中齢から老齢級のモミが多く生育し、保護対象であるモミ群落は、良好な状態で維持されている。高木層は高さ20~26m、胸高直径40-100cm（最大はモミ）程度。 | 増沢モミ植物群落保護林は、モミが群生する天然林の保護を目的とした保護林である。5ha未満と面積要件は満たしていないが、①大径木が林立する良好なモミ群落である。また、保護林に隣接する南側の区域には、同様にモミの優占する林分が広がっているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。<br>■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林に隣接する南側区域の分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。 | 保留        |

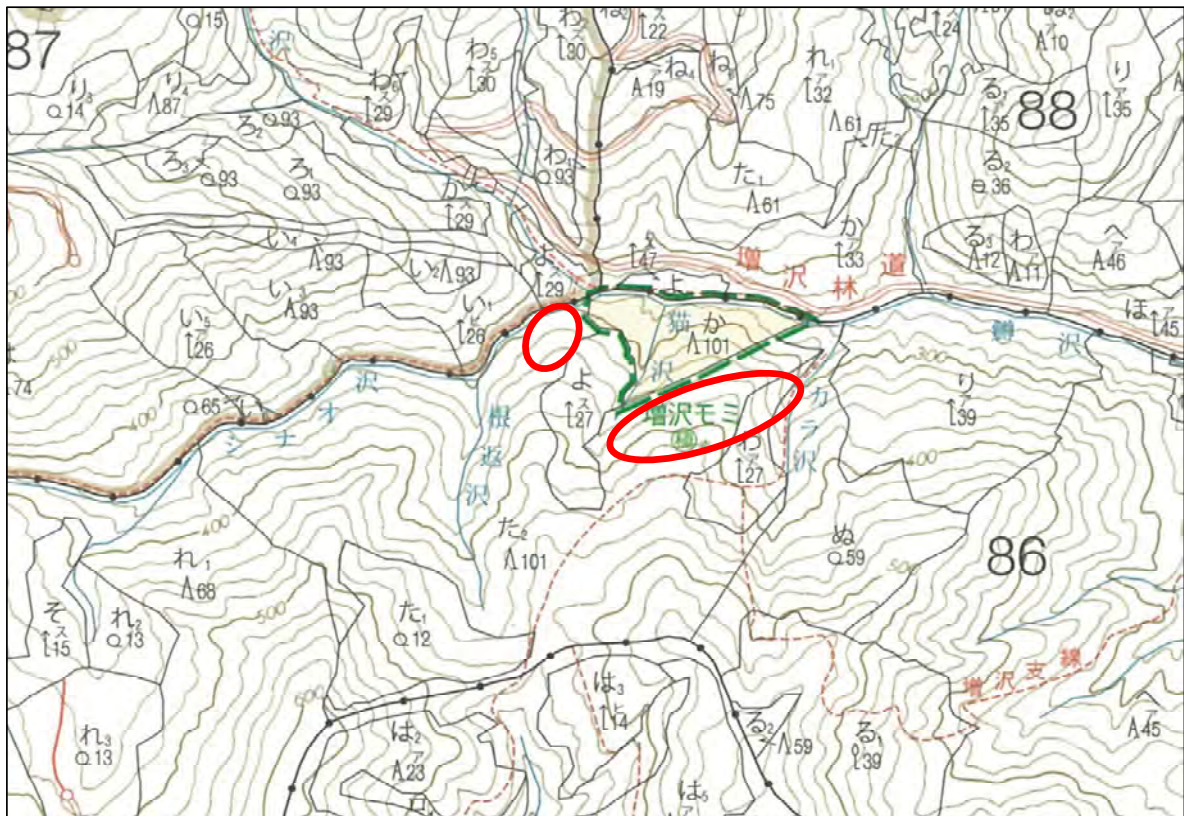
区域の拡張

|   |                      |
|---|----------------------|
| 増沢モミ植物群落保護林は、モミが群生する天然林の保護を目的とした保護林である。5ha未満と面積要件は満たしていないが、①大径木が林立する良好なモミ群落である。また、保護林に隣接する南側の区域には、同様にモミの優占する林分が広がっている。このため、廃止せず、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。<br>■今後の検討事項：保護林区域の拡張。保護林の南側の区域を拡張する（水源かん養保安林）。【添付図参照】 | 希少個体群保護林<br>新名称：増沢モミ |
|---|----------------------|

■ 本坂峠ヤブツバキ 植物群落保護林



■ 増沢モミ 植物群落保護林



| 既設区分    | 名称                 | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称 |
|---------|--------------------|---------|--|---|---|-----------|
| 植物群落保護林 | 南房総暖温帯性<br>みなみぼうそう | 4.24    | モミを主とし、スギ、アカマツ等の針葉樹にカシ、シイ、シデ類やヤブツバキ、カエデ類等の広葉樹が混交する房総半島南部の代表的な天然林であり、これを保護するため設定する。 | 保護林全体に高齢から老齢級のモミが生育し、また、中齢から高齢級のアラカシやウラジロガシが混生している林相にある。高木層は高さ19~28m、胸高直径40-100cm（最大はモミ）程度。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による壊滅的な影響を受け、次世代を担うモミ・ウラジロガシ・アラカシなどの低木や稚樹は全く見られない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、モミ・カシ類混交群落として存続できなくなる可能性もあると評価される。さらには、林床の植生率の低下により、急傾斜地では根の露出が進行しており、このまま裸地化が進行していくと、斜面崩壊に及ぶ危険性もあるものと評価される。 | 南房総暖温帯性植物群落保護林は、モミを主とし、スギ、アカマツ等の針葉樹にカシ、シイ、シデ類やヤブツバキ、カエデ類等の広葉樹が混交する房総半島南部の代表的な天然林の保護を目的とした保護林である。5ha未満と面積要件は満たしていないが、①大径木が林立する良好なモミ群落であるとともに、千葉管内には少ない保護林の一つである。また、保護林に隣接する北東側の区域には、同様にモミの優占する林分が広がっているため、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。このため、保留扱いとする。<br><br>■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林に隣接する北東側区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。 | 保留        |

区域の拡張

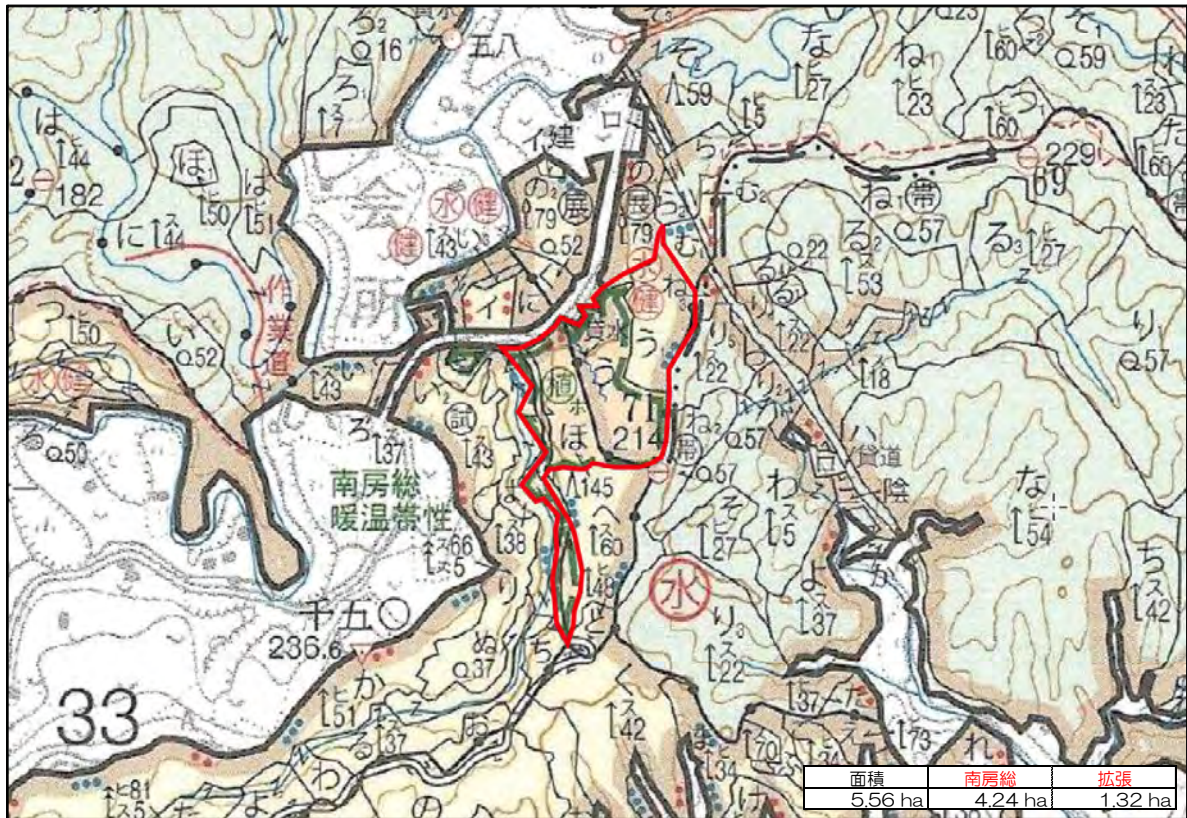
|   |                       |
|---|-----------------------|
| 南房総暖温帯性植物群落保護林は、モミを主とし、スギ、アカマツ等の針葉樹にカシ、シイ、シデ類やヤブツバキ、カエデ類等の広葉樹が混交する房総半島南部の代表的な天然林の保護を目的とした保護林である。5ha未満と面積要件は満たしていないが、①大径木が林立する良好なモミ群落であるとともに、千葉管内には少ない保護林の一つである。また、保護林に隣接する北東側の区域には、同様にモミの優占する林分が広がっている。このため、廃止せず、保護林区域を拡張した上で、希少個体群保護林とする。<br><br>■検討事項：保護林区域の拡張。保護林の北東側の区域の拡充を検討する（水源かん養保安林、保健保安林）。【添付図参照】【様式31参照】<br><br>■今後の検討課題：鳥獣害対策の実施。シカによる林床植生の食害が著しいため、林床植生を回復させるための対策の実施が急務である。 | 希少個体群保護林<br>新名称：南房総モミ |
|---|-----------------------|

| 既設区分    | 名称          | 面積 (ha)  | 設定目的   | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称 |
|---------|-------------|----------|--|--|--|-----------|
| 植物群落保護林 | 茂庭ブナ<br>もにわ | 1,291.50 | 学術的価値の高いブナ群落が生育する場所として、植物群落及び歴史的、学術価値を有する群落の維持を図るため設定する。 | 中齢から老齢級のブナが広面積に多く生育し、保護対象であるブナ群落は、良好な状態で維持されている。旧国道13号線はひどく荒れており、また、二ツ小屋トンネルは崩落の危険があるため、到達は不可である。駐車位置までのアプローチが改善されない限り、調査は困難である。 | 駐車位置までのアプローチとして利用する。旧国道13号線はひどく荒れており、また、二ツ小屋トンネルは崩落の危険があるため、平成20年度のもニタリング調査以降、到達は不可である。駐車位置までのアプローチが改善されない限り、調査は困難であるため、判断を保留する。 | 保留        |

廃止


|  |                      |
|--|----------------------|
| 本保護林は、高齢級のブナを含む希少な個体群ではあるが、周囲にも広く分布するブナ群落の一林分である。このブナ林は、近くに位置する吾妻山周辺生態系保護地域に代表されており、保護林としての希少性がそれほど高くないと考えられることから廃止する。廃止に当たっては、周囲が鳥海朝日・飯豊吾妻緑の回廊であることから、緑の回廊に編入し、引き続き自然維持タイプによる管理を行う。【様式31参照】 | 廃止（鳥海朝日・飯豊吾妻緑の回廊へ編入） |
|--|----------------------|

■ 南房総段温帯性 植物群落保護林





様式-31

| 現地調査計画及び総括整理表   |                          |  写真1<br>プロット1林内<br>シカ害により林床植生<br>は衰退している。 |  写真2<br>プロット1林内<br>高木類は健全に生育し<br>ている。 |  写真3<br>既に侵食が引き起こされ、<br>根が露出している樹木も見<br>受けられる。 |        |
|---|--------------------------|--|--|---|--------|
| 保護林名  | 南房総暖温帯性植物群落保護林           |  |  |   |        |
| 整理番号  | 105                      |  |  |   |        |
| 森林管理局名  | 関東森林管理局                  |  |  |   |        |
| ① 現地調査計画  |                          |  |  |   |        |
| 保護林概況写真   | 調査項目                     | 森林調査   |  | 動物調査  | 利用動態調査 |
|  保護林外観 | 保護林の概況<br>(設定目的)         | モミを主とし、スギ、アカマツ等の針葉樹にカシ、シイ、シデ類やヤブツバキ、カエデ類等の広葉樹が混交する房総半島南部の代表的な天然林であり、これを保護するため設定した。<br>・設定日:平成2年4月1日<br>・面積:4.24ha            |  |   |        |
|   | 調査箇所(選定理由)<br>・ルート(所要時間) | 第1回モニタリング地点(H20年度設置)を活用する。<br>調査プロットは、暖温帯性群落の代表的な林分に、1地点設定されている。<br>駐車位置から調査地点まで約100m、徒歩5分程度。                                |  | -   | -      |
|   | 調査時期、回数                  | 平成25年8月/計1回  |  | -   | -      |
|   | 調査項目                     | 毎木調査、植生調査、定点写真撮影   |  | -   | -      |
|   | 調査方法<br>(選定理由)           | 0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測する。植生調査では、植物の種組成の概要を把握する。また、シカ害が懸念されるため、保護林内を対象にシカ害の状況把握調査を実施した。                    |  | -   | -      |

② 総括整理表

| 調査項目 | 基礎調査   | 森林調査   | 動物調査 | 利用動態調査 |
|------|--|--|------|--------|
| 結果概要 | <p>【保護林概況】<br/>保護林は勝浦ダムの北西に位置し、全てが天然生林である。周辺国有林は人工林1が大半を占め、天然生林、育成天然林、人工林2が斑状に分布し、一部林地外も見られる。保護林は広く人工林1と接続するが、天然生林とも接続する。周辺の民有地は民有林が国有林の間に縫うように分布し、保護林の南側には公有林も広く見られる。保護林の中を会所治山管理道車道が通っており、保護林の南東には勝浦ダムが位置する。保護林は筒森自然観察教育林と接続する。</p> <p>【保護対象群落:モミ・カシ類混交群落】</p> <p>【平成24年度基礎調査結果】<br/>前回調査時と比較して、大きな変化は確認されなかった。次世代を担うモミの低木や稚樹は少ないものの、保護林全体に高齢から老齢級のモミが生育し、また、中齢から高齢級のアラカンやウラジロガシが混生している林相にあり、保護対象である、常緑広葉樹の混生するモミ群落は、良好な状態で維持されている。保護林全体に、ニホンジカの糞や角研ぎ痕が確認された。</p> <p>【調査プロットの代表性検討結果】<br/>前回調査のプロット1は、胸高直径60-100cmのモミが優占する林相で、高齢から老齢木に枯損は見られず、保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。</p> | <p>【調査プロット1(継続):モミ群落】(標高181m)</p> <p>①山腹平衡斜面に成立しているモミ群落。気候的・土地的極相林。<br/>②高木層は高さ19~28m、胸高直径40-100cm(最大はモミ)、植被率100%で、モミが優占して生育し、アラカン、ウラジロガシが混生している。亜高木層は高さ10m、植被率70%で、アラカンなどが優占している。低木層、草本層は、シカ害のため、ほとんど欠落している。草本層に生育している植物は、シカの忌避植物である、アリオシ、ヒイラギ、ミヤマシキミなどのみとなっている。<br/>③高木層・亜高木層を構成する胸高直径18cm以上の保存対象種であるモミは8本生育している(最大99.0cm)。また、カシ類としては、ウラジロガシが6本(最大26.3cm)、アラカシが3本生育している(最大20.1cm)。高齡~老齡木からなるモミ林に中齡のカシ類などが混在している様相を呈している。<br/>④次世代を担うモミの中低木(小円部:胸高直径1cm以上、中円部:4cm以上18cm未満)は見られない。一方で、常緑のカシ類は3本が生育している。また、小円部における植生調査の結果でも、低木層にモミの生育は認められず、草本層でも生育は僅かである。<br/>⑤前回調査と比較してモミ・ツガの新たな枯損は認められないが、草本層の植被率が40%から10%に低下しており、シカ害による影響が顕著化している。また、急斜面に生育している樹木の根際が侵食により露出しているところも見受けられ、シカ害による悪循環が進行している。</p> | -    | -      |
| 評価   | -  | 高木層はモミが優占した状態にあり、また、第2高木層や亜高木においては、ウラジロガシ、アラカシなどのカシ類が優占した状態にあり、保護対象群落であるモミ・カシ混交群落の上層木は健全な状態で維持されている。しかしながら、林内の低木、草本層はシカの食害による壊滅的な影響を受け、次世代を担うモミ・ウラジロガシ・アラカシなどの低木や稚樹は全く見られない状況にある。このまま、シカによる林内植生の過食圧が継続し、群落の更新が進行しない場合、モミ・カシ類混交群落として存続できなくなる可能性があると評価される。さらには、林床の植被率の低下により、急傾斜地では根の露出が進行しており、このまま裸地化が進行していくと、斜面崩壊に及ぶ危険性もあるものと評価される。   | -    | -      |
| 課題   | 上層に温帯性のモミ、林内に暖帯性の常緑広葉樹が混生する房総半島南部特有の様相を呈している植物群落であり、林内内構造の変化など、植物群落の動態に留意していく必要がある。また、次世代を担うモミの低木や実生が少ないことから、経過に留意する必要がある。さらに、ニホンジカの生息分布域にあたるため、食害による林床植生や後継木への影響を注意深く監視する必要がある。   | ニホンジカの食害による林床植生への影響が顕著に現れているため、シカの侵入防止柵の設置による林床植生の回復や、シカの個体数管理など、抜本的な対策の実施が必要である。  | -    | -      |

様式-31

| 現地調査計画及び総括整理表   |  | 写真1   | 写真2   | 写真3   |        |
|---|--|---|---|---|--------|
| 保護林名  | 茂庭ブナ植物群落保護林  |    |  |  |        |
| 整理番号  | 053  |   |   |   |        |
| 森林管理局名  | 関東森林管理局  |   |   |   |        |
| ① 現地調査計画  |  |   |   |   |        |
| 保護林概況写真   | 調査項目   | 森林調査  |   | 動物調査  | 利用動態調査 |
|  | 保護林の概況 (設定目的)  | 学術的価値の高いブナ群落が生育する場所として、植物群落及び歴史的、学術価値を有する群落の維持を図る。<br>・設定日：平成16年<br>・面積：1291.5ha  |   |   |        |
|   | 調査箇所(選定理由)・ルート(所要時間)   | 第1回モニタリング地点(H20年度設置)を活用する。調査プロットは、保護林内における代表的なブナ群落が形成されている林分に、3地点設定されている。<br>駐車位置から調査地点まで約4100m～5100m、徒歩2時間～3時間程度。<br><br>⇒駐車位置に行く途中の二ツ小屋隧道崩落(廃道のため管理者不明)により到達不可。<br>(トンネル前の国道付近に駐車して徒歩距離が約2000m増えるため、調査時間も考慮して、到達不可とした。) |   | -   | -      |
|   | 調査時期、回数  | 平成25年10月/計1回 隧道崩落地点の写真撮影を行った。   |   | -   | -      |
|   | 調査項目   | 毎木調査、植生調査、定点写真撮影 (到達不可)   |   | -   | -      |
| 調査方法 (選定理由)   | 0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測した。植生調査では、植物の種組成の概要を把握した。(到達不可) |   |   |   |        |

② 総括整理表

| 調査項目 | 基礎調査   | 森林調査  | 動物調査 | 利用動態調査 |
|------|--|---|------|--------|
| 結果概要 | <p>【保護林概況】</p> <p>保護林は七ツ森の山麓から栗子山の東側斜面まで広がり、そのほとんどが天然生林である。一部に育成天然林、林地外が見られる。周辺国有林は、天然生林が広く分布するが、育成天然林、人工林1、人工林2、林地外も見られる。保護林より北側では人工林1が多く見られる。保護林の北側と南側には鳥海朝日・飯豊吾妻緑の回廊が接続する。また、保護林は茂庭自然環境保全地域を含む。</p> <p>【保護対象群落：ブナ群落】</p> <p>【平成24年度基礎調査結果】</p> <p>平成24年度に行われた基礎調査では、前回調査時と比較して、大きな変化は確認されなかった。中齢から老齢級のブナが広面積に多く生育し、保護対象であるブナ群落は、良好な状態で維持されていると報告されている。旧国道13号線はひどく荒れており、また、二ツ小屋トンネルは崩落の危険があり、注意が必要である。このまま放置すると、到達できなくなる可能性がある。</p> <p>【調査プロットの代表性検討結果】</p> <p>前回調査のプロット1・2・3はいずれも、胸高直径20-60cmのブナが優占する林相で、高齢木・老齢木に枯損は見られず、保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。</p> | <p>【到達不可】</p>   | -    | -      |
| 評価   | -  | -   | -    | -      |
| 課題   | ブナ林に依存した希少植物の生育が考えられるので、植生調査時にはその点に留意することが望ましい。アクセス困難であり危険が伴うことが予想されることから、安全と調査時間の配分に留意する必要がある。  | 駐車位置までのアプローチが改善されない限り、プロット調査は困難である。   | -    | -      |

■ 関東森林管理局における郷土の森の概要資料

### 郷土の森の概要

**【国有林野全体】40箇所、4千ha**

**【目的】**  
 地域における象徴としての意義を有する等により、森林の現状の維持について地元市町村の強い要請がある。森林を保護し、併せて地域の振興に資することを目的とする。

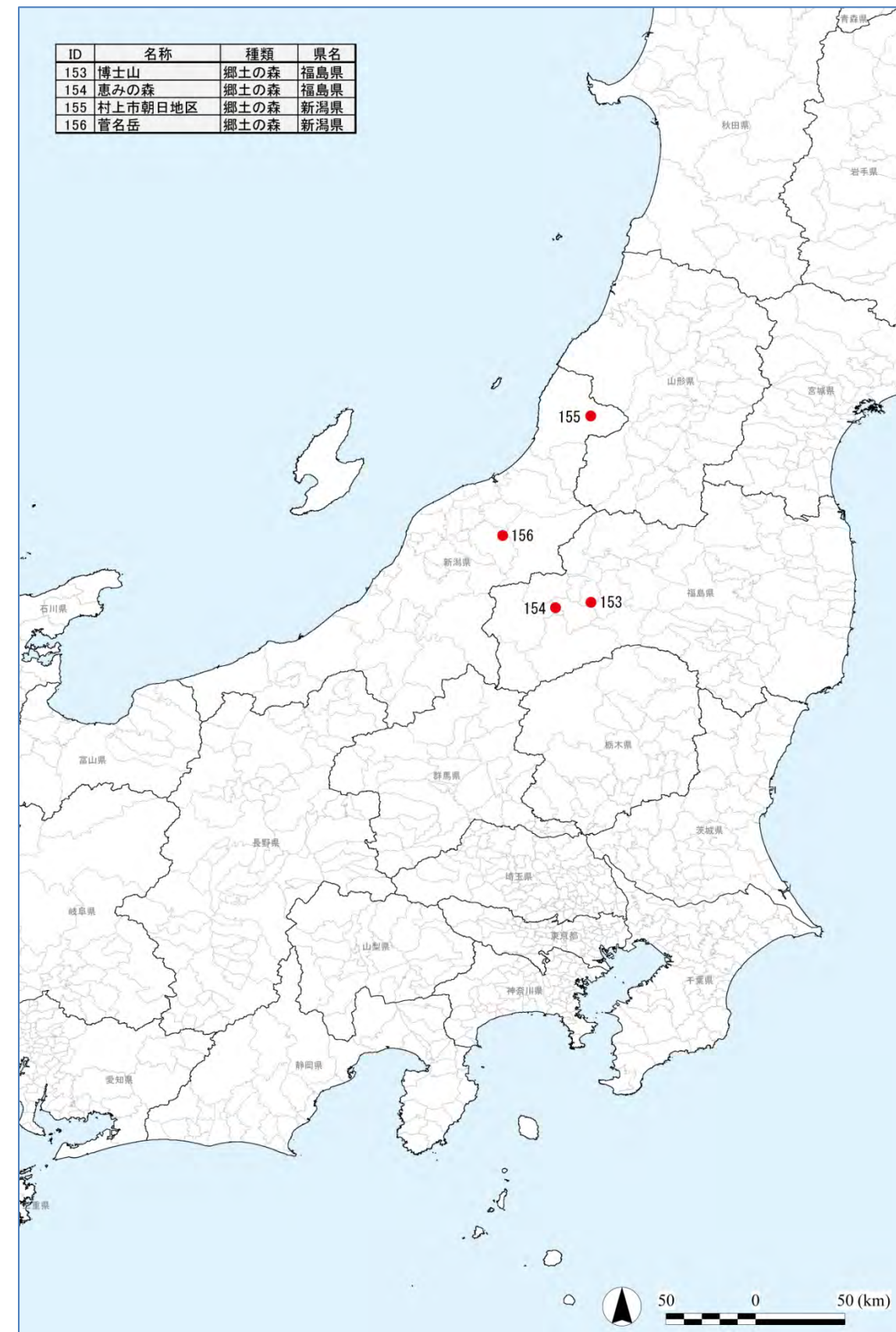
**【設定基準】**

- ・木材産業、農林業等地域の産業との調整が図られていること。
- ・森林管理局長と市町村長の郷土の森保存協定が締結され、国有林野の経理運営上支障がないこと。

**【関東森林管理局内】4箇所、1千ha**

| 保護林名称   | 位置  | 設定目的  |
|---------|-----|---|
| 博士山     | 福島県 | 貴重な森林の保護とともに、自然探勝や森林浴など霊峰博士山を利用するなかで地域振興にも寄与するよう積極的な活用を図る。                          |
| 恵みの森    | 福島県 | ブナを主体とする森林を保護するとともに、当該地域の歴史・文化的背景を踏まえた活用を図る。  |
| 村上市朝日地区 | 新潟県 | 古くから地域の人々に親しまれてきた見事な原生林を保護するとともに、自然探勝や森林浴などに利用するなかで、地域振興にも寄与しながら、原生的なブナ林を長く後世に保存する。 |
| 菅名岳     | 新潟県 | 五泉市の東部にそびえる名峰菅名岳の貴重な森林の保護とともに、自然探勝や森林浴など霊峰菅名岳を利用するなかで、地域復興にも寄与するよう積極的な活用を図る。        |

■ 関東森林管理局管内における郷土の森の位置図



| 既設区分 | 名称           | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称 |
|------|--------------|---------|--|--|--|-----------|
| 郷土の森 | 菅名岳<br>すがなだけ | 214.46  | 五泉市の東部にそびえる名峰菅名岳の貴重な森林の保護とともに、自然探勝や森林浴など霊峰菅名岳を利用するなかで、地域復興にも寄与するよう積極的な活用を図るため設定する。 | 保護林内は、地形条件、立地条件に応じて、老齢木からなる溪畔林や、ブナ林、多雪地形に対応した矮性ブナ林など、様々なタイプの森林植生が分布している。また、ブナ、トチノキともに老齢の大径木が多く分布し、沢沿いの老齢木に着生するシダ類や、陰湿な谷地形に生育するシダ類など、特徴的な植物の生育も見られ、郷土の森としての景観資源に優れた良好な状態で維持されている。 | 郷土の森は地元市町村との協定に基づく保護林であり、今後も引き続き利用するか要望を確認する必要がある。一方、菅名岳郷土の森は、老齢木からなる溪畔林や、ブナ林、多雪地形に対応した矮性ブナ林など、様々なタイプの森林植生の保護を目的とした保護林である。⑦地域で活用される貴重な天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。これらのことから、保留扱いとする。<br><br>■今後の検討課題：①旧郷土の森における保存協定の取り扱いの検討が必要。 | 保留        |

廃止

|   |    |
|---|----|
| 菅名岳郷土の森は、再編後の3区分に当てはまらないタイプの保護林であるため廃止し、引き続き自然維持タイプによる管理を行う。なお、五泉市から、今後も保全を図りつつ利用していきたいとの要望がある。 | 廃止 |
|---|----|

| 既設区分 | 名称           | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称 |
|------|--------------|---------|--|---|--|-----------|
| 郷土の森 | 博士山<br>はかせやま | 204.02  | 貴重な森林の保護とともに、自然探勝や森林浴など霊峰博士山を利用するなかで地域復興にも寄与するよう積極的な活用を図るため設定する。 | 保護林内は、博士山山頂付近まで主にブナ林が広がり、沢沿いにサワグルミやトチノキの群落が見られる。また、尾根沿いにはクロバヤアスナロが生育している。 | 郷土の森は地元市町村との協定に基づく保護林であり、今後も引き続き利用するか要望を確認する必要がある。一方、博士山郷土の森は、ブナ林や、沢沿いのトチノキ・サワグルミ林、尾根部のクロバヤアスナロ林など、様々なタイプの森林植生の保護を目的とした保護林である。⑦地域で活用される貴重な天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林としてのポテンシャルがある。これらのことから、保留扱いとする。<br><br>■今後の検討課題：①旧郷土の森における保存協定の取り扱いの検討が必要。 | 保留        |

廃止

|   |    |
|---|----|
| 博士山郷土の森は、再編後の3区分に当てはまらないタイプの保護林であるため廃止し、引き続き自然維持タイプによる管理を行う。なお、柳津町から、今後も保全を図りつつ利用していきたいとの要望がある。 | 廃止 |
|---|----|

| 既設区分 | 名称             | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称 |
|------|----------------|---------|--|--|---|-----------|
| 郷土の森 | 恵みの森<br>めぐみのもり | 470.45  | ブナを主体とする森林を保護するとともに、当該地域の歴史・文化的背景を踏まえた活用を図るため設定する。 | 保護林内は、大部分が高齢から老齢級のブナが優占したチシマザサ・ブナ群団で、一部にブナ・ミズナラ群落、常緑針葉樹林がある。 | 郷土の森は地元市町村との協定に基づく保護林であり、今後も引き続き利用するか要望を確認する必要がある。一方、恵みの森郷土の森は、大部分が高齢から老齢級のブナが優占したチシマザサ・ブナ群団で、一部にブナ・ミズナラ群落、常緑針葉樹林が分布している。このように、本郷土の森は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林としてのポテンシャルがある。これらのことから、保留扱いとする。<br><br>■今後の検討課題：①旧郷土の森における保存協定の取り扱いの検討が必要。 | 保留        |

廃止

|  |    |
|--|----|
| 恵みの森郷土の森は、再編後の3区分に当てはまらないタイプの保護林であるため廃止し、引き続き自然維持タイプによる管理を行う。なお、只見町から、今後も保全を図りつつ利用していきたいとの要望がある。 | 廃止 |
|--|----|

| 既設区分 | 名称                            | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称 |
|------|-------------------------------|---------|--|--|--|-----------|
|      | 郷土の森<br>村上市朝日地区<br>むらかみしあさひちく | 200.00  | 古くから地域の人々に親しまれてきた見事な原生林を保護するとともに、自然探勝や森林浴などに利用するなかで、地域振興にも寄与しながら、原生的なブナ林を長く後世に保存するために設定する。 | ブナを主体とした広葉樹林が主体をなし、ブナをはじめ、トチノキ等の老齢の大径木が多く分布している。 | ■今後の検討課題：①朝日山地森林生態系保護地域に介在する「村上市朝日地区郷土の森」は、生態系保護地域と同様の植生を有しており、一体的に管理することが妥当と考えられるため、森林生態系保護地域に組み込むことを検討する。②旧郷土の森における地元市町村との保存協定の取り扱いの検討が必要。 | 保留        |
|      |                               |         |  | 廃止   | 村上市朝日地区郷土の森は、再編後の3区分に当てはまらないタイプの保護林であるため廃止し、引き続き自然維持タイプによる管理を行う。なお、村上市から、今後も保全を図りつつ利用していきたいとの要望がある。  | 廃止        |

資料 3-2. 保護林名称の変更

| 既設区分      | 名称              | 面積 (ha) | 設定目的  | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称   |
|-----------|-----------------|---------|---|--|---|---|
| 林木遺伝資源保存林 | 小川ブナ群落<br>おがわ   | 32.49   | 林木育種事業を計画的、能率的に実施するため現存する林木の優良遺伝子群を確保し、これを保存し、遺伝子補給源として活用するために設定する。 | 低標高地に生育するブナを含む群落。コナラ・ミズナラが優占し、ブナ（大径木）やイヌブナが散在している林相にある。高木層は高さ32m、胸高直径18-114cm(最大はブナ)、植被率100%で、ミズナラが優占し、コナラ、ブナなどが混生している。ただし、ブナの大径木は少なく、枯損が進行している。 | 小川ブナ群落林木遺伝資源保存林は、低標高地に残存しているブナの遺伝資源の保存を目的とした保護林であり、小川ブナ植物群落保護林も同様に、低標高地に残存しているブナ群落の保護を目的とした保護林である。また、定波シラカンバ植物群落保護林も同様に、低標高地に残存しているシラカンバ群落の保護を目的とした保護林である。このように、これらの保護林は、①大径木に生育したブナ・ミズナラ・コナラなどの希少化している個体群、②低山帯といった分布限界域に位置するブナの個体群、③温暖化等の影響により将来的に消失が懸念される冷温帯性の個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。なお、これらの保護林は隣接して存在していることから、低標高地のブナに代表させた一つの保護林として再編する。 | 希少個体群保護林<br>新名称：小川低山帯ブナ 遺伝資源<br>低山帯に残存しているブナであることを強調するため、「低山帯」を挿入する。<br>「林木遺伝資源保存林」をより面積の大きな「植物群落保護林」に統合するため、『遺伝資源』を外したい。 |
| 植物群落保護林   | 小川ブナ<br>おがわ     | 67.42   | ブナ・ミズナラを主体とした代表的な温帯性原生林で、この地方では学術上貴重な森林であり、これを保護するため設定する。           | 保護林内は全体的に樹高が低く、高木のブナは生育しているものの、高齢林には至らず成熟途上の段階にある。一部谷筋を主体に高齢成熟林が見られるが、高齢成熟段階にあるものはコナラやミズナラが主体となっている。   |   |   |
| 植物群落保護林   | 定波シラカンバ<br>さだなみ | 3.60    | 県内におけるシラカバ自生地は非常に少なく、特に群生するシラカバは、この地方にとって学術上貴重なもので、これを保護するため設定する。   | コナラやヤマザクラなどの雑木類にシラカンバが混生している天然生林。高木層は高さ26m、胸高直径19-41cm(最大はシラカンバ)、植被率100%で、コナラが優占し、アカシデ、シラカンバ、カスミザクラ、ヤマザクラなどが混生している。                              |   |   |

名称の変更

↓  
希少個体群保護林  
新名称：小川ブナ  
名称のルール『移行する時に遺伝資源を付する』に従って、統合は移行ではないので、遺伝資源を付さない。

| 既設区分      | 名称                 | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称   |
|-----------|--------------------|---------|--|--|---|---|
| 林木遺伝資源保存林 | 木戸川コナラ<br>きどがわ     | 6.58    | コナラの遺伝資源を保存するため設定する。   | 高齢級のコナラとモミが混在して優占する林相にある。コナラは非常に大きく、胸高直径80cm~90cmの個体が多く認められる。下層は1.5~2.0mのスズケが5・5程度の被度・群度で保護林の全域で繁茂している。コナラの実生・低木は僅か、今後はモミ林へと遷移していくと思われる。 | 木戸川コナラ林木遺伝資源保存林は、中間温帯に成立しているコナラ天然林の遺伝資源を保存するために設定された保護林であり、木戸川モミ・コナラ等植物群落保護林も同様に、中間温帯のモミが混在したコナラ天然林の保護を目的とした保護林である。両保護林とも、②中間温帯域の天然林として貴重である。また、①高齢級のモミとコナラが混在した同様の林相にあり、隣接しているため、一体的に管理することが妥当と考えられる。このため、両保護林を統合した上で、希少個体群保護林として再編する。 | 希少個体群保護林<br>新名称：木戸川中間温帯コナラ 遺伝資源<br>中間温帯域に成立しているコナラ天然林であることを強調するため、「中間温帯」を挿入する。<br>「林木遺伝資源保存林」をより面積の大きな「植物群落保護林」に統合するため、『遺伝資源』を外したい。 |
| 植物群落保護林   | 木戸川モミ・コナラ等<br>きどがわ | 101.65  | モミ、コナラ等落葉広葉樹を主とした針広混交林で、原生林に準じた林層を呈し、その遷移等学術参考及び森林施業上の考証として価値が高く、ここれを保存するため設定する。 | コナラとモミが優占する林が広がっている。モミやコナラの胸高直径は70~90cm程度あり、高齢林の林相にある。また、林床は、高さ1.5~2.0mのスズケが5・5程度の被度・群度で保護林全域に繁茂している。                                    |   |   |

名称の変更

↓  
希少個体群保護林  
新名称：木戸川コナラ  
名称のルール『移行する時に遺伝資源を付する』に従って、統合は移行ではないので、遺伝資源を付さない。

| 既設区分      | 名称                       | 面積 (ha) | 設定目的  | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称   |
|-----------|--------------------------|---------|---|--|---|---|
| 林木遺伝資源保存林 | 西ノ湖畔ヤチダモ<br>さいのこはん       | 18.05   | ヤチダモの遺伝資源を保存するため設定する。   | ミズナラとヤチダモの混交林が広がっている。湖畔域にヤチダモの優占する林分が見られる。木層は高さ38m、胸高直径24-90cm（最大はミズナラ）、植被率90%で、ヤチダモが優占し、ミズナラが混生している。                        | 西ノ湖畔ヤチダモ林木遺伝資源保存林、千手ヶ原ドロノキ林木遺伝資源保存林、千手ヶ原ミズナラ・ハルニシ植物群落保護林の三つの保護林は、何れも西ノ湖と中禅寺湖間の氾濫原に成立している湿潤立地性の天然林である（当該地域の谷型の天然林）。何れの保護林も、①ミズナラ、ハルニシ、ドロノキなどの大径木に生育した希少化した個体群を含み、⑤湿潤な立地を好むミズナラ、ハルニシ、ドロノキなどが混在または優占して生育する同様な林相にある。このため、保護林を統合し、一体的に管理することが妥当と考えられるため、希少個体群保護林に再編する。 | <b>希少個体群保護林</b><br>新名称：千手ヶ原ミズナラ・ハルニシ・ヤチダモ 遺伝資源<br>「林木遺伝資源保存林」をより面積の大きな「植物群落保護林」に統合するため、『遺伝資源』を外したい。 |
| 林木遺伝資源保存林 | 千手ヶ原ドロノキ<br>せんじゅがはら      | 13.20   | ドロノキの遺伝資源を保存するため設定する。   | ハルニシ、サウグルミ、オオバヤナギ、ミズナラ等の溪畔要素の樹種により構成される林分が広がっている。保存対象樹種であるドロノキは、保護林内ではほとんど確認されていない。  |   |   |
| 植物群落保護林   | 千手ヶ原ミズナラ・ハルニシ<br>せんじゅがはら | 67.70   | 奥日光地帯の代表的樹種であるミズナラ、ハルニシが群生、特にハルニシ林は奥日光地域でも少なくなってきたり、保護の必要があるため設定する。 | ミズナラ、ハルニシが優占する天然生林。戦場ヶ原湿原の南部に広がる標高約1300mの概ね平坦地に成立している。保護林内には、かつての氾濫原にミズナラとハルニシが混交する林分が広がる。高木層は高さ32m、胸高直径25-155cm（最大はミズナラ）程度。 |   |   |

名称の変更

希少個体群保護林  
 新名称：千手ヶ原ミズナラ・ハルニシ  
 名称のルール『移行する時に遺伝資源を付する』に従って、統合は移行ではないので、遺伝資源を付さない。

| 既設区分      | 名称                | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称   |
|-----------|-------------------|---------|--|---|---|---|
| 林木遺伝資源保存林 | 西ノ湖マツ<br>さいのこ     | 16.5    | チョウセンゴヨウ、ヒメコマツ等の遺伝資源を保存するため設定する。                     | 保護林内はコメツガが優占しており、ヒメコマツは尾根筋に散在している。シカ食害による影響のためか、下層植生は貧弱。保存対象樹種であるチョウセンゴヨウは、プロット周辺では確認されていない。              | 西ノ湖マツ林木遺伝資源保存林、西ノ湖ヤシオツツジ植物群落保護林の二つの保護林は、何れも西ノ湖の東側から南側の稜線から山腹急斜面に成立している乾性立地性の天然林である（当該地域の尾根型の天然林）。何れの保護林も、①岩角地といった特殊な立地を好むヒメコマツ、チョウセンゴヨウ、シロヤシオなどが混在または優占して生育している同様な林相にある。このため、保護林を統合し、一体的に管理することが妥当と考えられるため、希少個体群保護林に再編する。 | <b>希少個体群保護林</b><br>新名称：西ノ湖ヒメコマツ・シロヤシオ 遺伝資源<br>「林木遺伝資源保存林」をより面積の大きな「植物群落保護林」に統合するため、『遺伝資源』を外したい。 |
| 植物群落保護林   | 西ノ湖ヤシオツツジ<br>さいのこ | 39.74   | 原生林に準ずる森林で学術及び森林施業上の考証として必要なもの。西ノ湖岸の原生林の保護を図るため設定する。 | 保護林内には、ブナ、ウダイカンバ、カエデ類の広葉樹に、コメツガなどの針葉樹も混生する天然生林が広がる。護林内は、胸高直径40~80cm程度のコメツガ・ブナが優占し、シロヤシオが細尾根上に散在している林相にある。 |   |   |

名称の変更

希少個体群保護林  
 新名称：西ノ湖ヒメコマツ・シロヤシオ  
 名称のルール『移行する時に遺伝資源を付する』に従って、統合は移行ではないので、遺伝資源を付さない。

| 既設区分      | 名称               | 面積 (ha) | 設定目的  | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称  |
|-----------|------------------|---------|---|--|--|--|
| 林木遺伝資源保存林 | 元清澄山<br>もときよすみやま | 170.29  | 房総半島においては数少ない、モミ、ツガを主とし、カシ類等の暖温帯性植物が混生する天然林である。また、林内にはヒメコマツやキヨスミツバツツジ等が自生しており林木遺伝資源として貴重であり、これらを保存するため設定する。 | 尾根部においてはモミとツガが混交するモミ・ツガ林が分布し、斜面部においては、アラカシ、ウラジロガシ、ツクハネガシなどのカシ類が優占した常緑広葉樹林が分布している。保護林全体に、ニホンジカの糞や角研ぎ痕が多い。また、ヒメコマツについては、林木遺伝資源の保存のための個別個体管理が、千葉県、東大演習林、千葉森林管理事務所からなるヒメコマツ保全協議会により実施され、保全が図られている。キヨスミツバツツジについては、本調査では詳細な情報については収集していないため、生育個体数や個別個体の生育状態については不明な点が多い。 | 元清澄山林木遺伝資源保存林は、隔離分布しているツガ、ヒメコマツ、清澄山周辺の固有変種であるキヨスミツバツツジ（ミツバツツジの変種）の遺伝資源の保存を目的とした保護林である。これらの①希少化している個体群、②分布の南限に当たる個体群、③他の個体群から隔離された同種個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群、⑤岩各地といった特殊な立地に成立している個体群、⑥温暖化等の影響により将来的に消失が懸念される個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | <b>希少個体群保護林</b><br>新名称：元清澄山暖温帯性ツガ・ヒメコマツ・キヨスミツバツツジ 遺伝資源 |
|           |                  |         |   |  |  |  |

名称の変更

希少個体群保護林  
 新名称：元清澄山ツガ・ヒメコマツ 遺伝資源

| 既設区分    | 名称                  | 面積 (ha) | 設定目的  | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称  |
|---------|---------------------|---------|---|---|---|--|
| 植物群落保護林 | 上野檜原のシオジ<br>うえのならはら | 290.19  | 北沢一帯のシオジ天然分布の北限及びシオジを中心とする貴重な天然林の維持並びに植物社会の特殊な遷移の生態学的検証のため設定する。 | 保護林全体に中齢から高齢級のシオジが生育し、林床には低木・稚樹が生育して自然更新の状況も確認され、保護対象であるシオジ群落は、良好な状態で維持されている。保護林内において、ニホンシカの食痕や糞、保護林へ向かう途中でもニホンシカの痕跡が多数見られたが、植生に強い影響を及ぼすほどの被害はない。高木層は高さ18~30m、胸高直径27-115cm（最大はシオジ）程度。 | 上野檜原のシオジ植物群落保護林は、保護林全体に中齢から高齢級のシオジが生育し、当該地域の代表的な溪畔林の保護を目的とした保護林である。また、シオジの分布北限にも当たり、希少性を有した保護林でもある。このように、本植物群落保護林は、自然状態が十分保存され、溪畔種からなる天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、生物群集保護林への移行要件となる「300ha以上」に近い面積を有していることから、生物群集保護林とする。<br><br>■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、シオジを主体とする溪畔種の生育立地である谷筋のBE型土壌の分布する区域。ハッファ区域は、谷地形を取り巻く斜面とすることを検討。 | 生物群集保護林<br><br>新名称：上野檜原シオジ等溪畔種<br><br>生物群集保護林とした場合には個別生物名が入らないが、分布北限にも当たる「シオジ」を強調し、溪畔林を構成する生物群集を保護の対象とするため、『シオジ等溪畔種』を挿入する。 |

名称の変更  
鳥獣害対策の検討

|  |   |
|--|---|
| 上野檜原のシオジ植物群落保護林は、保護林全体に中齢から高齢級のシオジが生育し、当該地域の代表的な溪畔林の保護を目的とした保護林である。また、シオジの分布北限にも当たり、希少性を有した保護林でもある。このように、本植物群落保護林は、自然状態が十分保存され、溪畔種からなる天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、生物群集保護林への移行要件となる「300ha以上」に近い面積を有していることから、生物群集保護林とする。<br><br>■今後の検討課題：①地帯区分の検討。コア区域は、シオジを主体とする溪畔種の生育立地である谷筋のBE型土壌の分布する区域。ハッファ区域は、谷地形を取り巻く斜面とすることを検討。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。 | 生物群集保護林<br><br>新名称：上野檜原シオジ等溪畔種<br><br>当保護林の新名称は、原則では「上野檜原」生物群集保護林となる。しかし、当該地域の一部は国指定天然記念物であり、その名称は「上野檜原のシオジ林」として指定されている。地元自治体も「シオジ原生林ルート」のツアー等を催して首都圏からの誘客を図っている。また、公共施設である日帰り温泉施設「しおじの湯」があるなど、シオジを全面的にPRしているため、例外的に、保護林名称にシオジ等溪畔種を残すこととする。 |
|--|---|

| 既設区分    | 名称             | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称  |
|---------|----------------|---------|--|--|--|--|
| 植物群落保護林 | 大平モミ<br>おおだいら  | 1.57    | モミを主とするこの天然林は、モミの分布限界と言われている暖温帯上部から冷温帯下部に位置している。植物の森林帯を知る上で、大変貴重であり、これを保護するため設定する。 | 胸高直径30~60cm程度のモミが優占している。虫害を受けた枯損個体が数本見受けられたが、進行中の個体はなく、前回調査時と比較して、大きな変化は確認されない。  | 大平モミ植物群落保護林、高尾山モミ植物群落保護林ともに、モミの分布限界と言われている暖温帯上部から冷温帯下部に生育している貴重な群落である。両保護林とも高尾山の山麓に成立しているものであり、群落としての資質は同じものと考えられる。このように、両保護林は、②分布の上限に位置する個体群であり、両群落を合わせて飛び地指定することし、希少個体群保護林へ再編する。<br><br>■今後の検討課題：①飛び地の一体的な管理を検討する。 | 希少個体群保護林<br><br>新名称：高尾山冷温帯下部モミ<br><br>分布限界域のモミであることを強調するため、「冷温帯下部」を挿入する。 |
| 植物群落保護林 | 高尾山モミ<br>たかおさん | 3.28    | モミを主とするこの天然林は、モミの分布限界と言われている暖温帯上部から冷温帯下部に位置している。植物の森林帯を知る上で、大変貴重であり、これを保護するため設定する。 | 胸高直径30~60cm程度のモミが優占し、他にシラカシやコナラが亜高木に優占している。成木の数は少ないが、稚樹や幼樹は尾根上に多数生育している。保護林プロットでは、毎木対象のモミは0本（前回1本あったのが虫害により枯損）であるが、下層植生に、モミが20本程度生育している。森林生態系プロットでは、胸高直径30~40cm、高さ16~20mのモミが優占して生育している。しかし、下層植生にモミは見られない。シカの痕跡は見当たらない。虫害は、樹皮に噛み痕があったり、フラスが落ちていたりするので、カミキリムシかクイムシが原因のようである。 |  |  |

名称の変更

|                           |
|---------------------------|
| 希少個体群保護林<br><br>新名称：高尾山モミ |
|---------------------------|

| 既設区分    | 名称               | 面積 (ha) | 設定目的  | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称  |
|---------|------------------|---------|---|--|---|--|
| 植物群落保護林 | 和尚山温帯性<br>おしょうやま | 23.17   | ブナ、ミズナラを主とした代表的な温帯性原生林で、この地方では学術上貴重な森林でありこれを保護するため設定した。 | 和尚山国有林の山頂~山腹にかけて分布する天然林である。保護林内は、ブナ、ミズナラ、コナラ、クリなどが優占する林相にある。高木層は高さ23m、胸高直径15-105cm（最大はミズナラ）程度。 | 和尚山温帯性群落保護林は、低標高地に下降しているブナなどの温帯性樹種により構成された天然林の保護を目的とした保護林である。②低標高地に下降しているブナなどの温帯林を構成する希少な個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br><br>新名称：和尚山暖温帯上部ブナ<br><br>暖温帯に遺存しているブナであることを強調するため、「暖温帯上部」を挿入する。 |

名称の変更

|                           |
|---------------------------|
| 希少個体群保護林<br><br>新名称：和尚山ブナ |
|---------------------------|



| 既設区分    | 名称               | 面積 (ha) | 設定目的  | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称   |
|---------|------------------|---------|---|---|--|---|
| 植物群落保護林 | 唐沢ヤシオツツジ<br>からさわ | 57.08   | 原生林に準ずべき森林で、学術及び森林施業上の考証として必要なもの。ブナ林下のヤシオツツジ群生地を保護するため設定する。 | 保護林内は、コメツガ、ウラジロモミ等の常緑針葉樹の混交比が高い林分が広範囲に分布し、ブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹が優占する林分は中心部の尾根沿いに一部みられる。ヤシオツツジ（アカヤシオ、シロヤシオ）は林下に散生している。高木層は高さ22m、胸高直径25-60cm（最大はウラジロモミ）程度。 | 唐沢ヤシオツツジ植物群落保護林は、低標高地に降下しているコメツガを含み、林下にシロヤシオ、アカヤシオの生育する天然林の保護を目的とした保護林である。②低標高地に降下しているコメツガ、⑤痩稜地に生育するシロヤシオ、アカヤシオなど、希少な個体を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br>新名称：唐沢冷温帯コメツガ・シロヤシオ・アカヤシオ<br>冷温帯に降下しているコメツガであることを強調するため、「冷温帯」を挿入する。 |

名称の変更

|   |
|---|
| 希少個体群保護林<br>新名称：唐沢コメツガ<br>コメツガが全林木であるため『コメツガ』とする。【様式31参照】 |
|---|

| 既設区分    | 名称              | 面積 (ha) | 設定目的  | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称  |
|---------|-----------------|---------|---|--|---|--|
| 植物群落保護林 | 浄蓮暖温帯性<br>じょうれん | 37.35   | この地域では数少ない、アカガシ、ウラジロガシ、シイ、タブ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林であり、これを保護するため設定する。 | 保護林内は、胸高直径50~100cm程度のスタシイ、シラカシ、アラカシなどの高齢木が優占し、ヤマザクラ、アカマツなどの老齢木が混生する林となっている。ニホンジカによる林床植生の食害が著しいが、カシ類を主体に常緑樹が各階層に生育しており、実生が多く、更新している様子がうかがえる。保護林内に生育しているアカマツの大径木については、マツ枯れの防除対策が実施されている。 | 浄蓮暖温帯性植物群落保護林は、この地域では数少ない、アカガシ、ウラジロガシ、シイ、タブ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林の保護を目的とした保護林である。②常緑広葉樹林の分布域の上限にあたる天然林で、この地域では少ないウラジロガシやアカガシなどの個体を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br>新名称：浄蓮暖温帯上部ウラジロガシ・アカガシ<br>暖温帯上部に成立している常緑広葉樹林であることを強調するため、「暖温帯上部」を挿入する。 |

名称の変更

|                               |
|-------------------------------|
| 希少個体群保護林<br>新名称：浄蓮ウラジロガシ・アカガシ |
|-------------------------------|

| 既設区分    | 名称                         | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称                     |
|---------|----------------------------|---------|--|--|---|-------------------------------|
| 植物群落保護林 | 流石山・大峠風衝地<br>ながれいしやま・おおとうげ | 97.31   | 流石山・大峠周辺は、冬季の季節風による雪庇の発達もたらす特異な植生が分布し、全国的に見ると分布のほぼ南東端にあたるミヤマナラ群落分布している。ミヤマナラ群落が発達する地形と、ハイマツ群落、ニッコウキスゲなどが優占した雪田草原などが地形に応じて分布域を異にしており、地史、地形、気象との関係における分布域の問題を考察する上でも極めて貴重である。このため、特異な分布を示すこれらの亜高山帯植生を保護するため設定する。 | 県境稜線に沿って、ミヤマナラ、ガンコウラン、ニッコウキスゲ、ハクサンシャクナゲ、ササ類などが、ブナ帯を抜けた山頂斜面において特有の景観やお花畑を形成している。とりわけ、ミヤマナラは日本海側の亜高山帯に多いミズナラの変種とされる。ミヤマナラ群落は、雪崩斜面や過度の積雪と激しい風衝地形に発達している。ミヤマナラは、特有の地形を持つ日本海側多接地帯の亜高山帯では比較的普通に見られる。しかし、この地域のミヤマナラは、全国的に見るとほぼ南東端に当たり、基準種で高木性のミズナラとの関係等など種分化の問題、地史、地形、気象との関係における分布域の問題を考察する上でハイマツと並んで貴重な種となっている。この地域にはミヤマナラ群落が発達する地形とハイマツ低木林、ニッコウキスゲ草原等が地形に応じて分布域を異にしており、また、これらの山頂稜線域の亜高山性群落と、標高の低いブナ帯の高木性樹種の生育環境とを比較できる格好の場所となっている(林野庁2008、「平成20年度 緑の回廊設定にかかる基礎資料収集に係る調査業務報告書」)。保護林内は、ササ草原、落葉広葉樹低木群落が多く見られ、雪田草原はあまり見られない。毎木調査の対象となる林分は見られない。 | 流石山・大峠風衝地植物群落保護林は、ミヤマナラ群落やハイマツ群落などの風衝地低木群落を主体に、高山ハイデ及び風衝草原、ササ自然草原、雪田草原など、山頂稜線域の亜高山帯植生の保護を目的とした保護林である。このように、本植物群落保護林は、①⑤山頂稜線域の希少な亜高山帯植生を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br>新名称：流石山・大峠風衝ミヤマナラ |

名称の変更


|                             |
|-----------------------------|
| 希少個体群保護林<br>新名称：流石山・大峠ミヤマナラ |
|-----------------------------|

様式-31

現地調査計画及び総括整理表

|        |                 |
|--------|-----------------|
| 保護林名   | 唐沢ヤシオツツジ植物群落保護林 |
| 整理番号   | 067             |
| 森林管理局名 | 関東森林管理局         |





① 現地調査計画

|  | 調査項目   | 森林調査   | 動物調査 | 利用動態調査 |
|---|--|--|------|--------|
|   | 保護林の概況<br>(設定目的)   | 原生林に準ずべき森林で、学術及び森林施業上の考証として必要なもの。ブナ林下のヤシオツツジ群生地の保護を図る。<br>・設定日:昭和48年4月1日(平成6年4月1日)<br>・面積:57.08ha  |      |        |
|   | 調査箇所(選定理由)<br>・ルート(所要時間)   | 第1回調査(H19年度)では、モニタリング地点は積雪により未設定であるため、新規に設定した。調査プロット1は、基礎調査で抽出された針広混交林に設定した。調査プロット2は、基礎調査で抽出された候補地よりも尾根上部にある適地に設定した。県道169号線を通って大笹牧場に向かい、第3駐車場から管理用道路に入る。牧場内の路肩に駐車、林内へ続く尾根を登り調査プロットに到達する。駐車位置から調査プロット1まで約450m、徒歩20分程度。調査プロット2まで約520m、徒歩40分程度。 | -    | -      |
|   | 調査時期、回数  | 平成24年8月/計1回  | -    | -      |
|   | 調査項目   | 毎木調査、植生調査、定点写真撮影   | -    | -      |
| 調査方法<br>(選定理由)  | 0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測した。植生調査では、植物の種組成の概要を把握した。 | -  | -    |        |

保護林 林内

② 総括整理表

| 調査項目 | 基礎調査  | 森林調査   | 動物調査 | 利用動態調査 |
|------|---|--|------|--------|
| 結果概要 | <p><b>【保護林概況】</b><br/>当該保護林は、川俣国有林の山麓中部に位置する。中央部の標高は約1,500mで、北～北東向き斜面である。原生林に準べき森林で、ブナ林下にヤシオツツジの群生地がみられる。</p> <p><b>【平成23年度基礎調査結果】</b><br/>現地概況調査(H23年度)では、保護林内は、コメツガ、ウラジロモミ等の常緑針葉樹の混交比が高い林分が広い範囲を占め、ブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹が優占する林分は中心部の尾根沿いに一部みられ、林床下のヤシオツツジ(アカヤシオ、シロヤシオ)は散生していると報告されている。</p> <p><b>【平成24年度概況把握結果】</b><br/>本年度、モニタリング調査時に行った概況把握では、アカヤシオ、シロヤシオの群生はブナ林下では確認されず、ウラジロモミ林下で確認された。</p> <p><b>【調査プロットの代表性検討結果】</b><br/>プロット1は、ウラジロモミが優占する林相で、林内にシロヤシオとアカヤシオが生育している地点であるため、調査プロットを設定した。プロット2は、ウラジロモミが優占する林相で、林内にシロヤシオが生育している地点であるため、調査プロットを設定した。</p> | <p><b>【調査プロット1(新規):ウラジロモミ群落(標高1395m)</b><br/>①山腹平衡斜面に成立しているウラジロモミ群落。気候的極相林。<br/>②高木層は高さ25m、胸高直径40-65cm(最大はウラジロモミ)、植被率60%で、ウラジロモミが優占し、ダケカンバ、ハウチワカエデなどが生育している。亜高木層は高さ8m、植被率60%で、シロヤシオが優占して生育し、ウラジロモミ、ダケカンバなどが混生している。低木層は高さ4m、植被率40%で、シロヤシオ、マルバマンサクなどが優占して生育している。草本層は高さ1.2m、植被率90%で、クマイザサが高被度で優占し、他の生育種は僅かである。<br/>③プロット内にはシロヤシオが12本、アカヤシオが2本確認されており、いずれも健全に生育している。高木層の植被率が60%、亜高木層の植被率が60%と低い状況が、林内に生育するシロヤシオ、アカヤシオの生育にとって好適な条件になっていると考えられる。<br/>④プロット内でニホンジカの痕跡(足跡、剥皮、糞、食痕)が確認された。ウラジロモミにはシカ剥皮防止ネットがかけられている。</p> <p><b>【調査プロット2(新規):ウラジロモミ群落(標高1477m)</b><br/>①山腹平衡斜面に成立しているウラジロモミ群落。気候的極相林。<br/>②高木層は高さ22m、胸高直径25-60cm(最大はウラジロモミ)、植被率60%で、ウラジロモミが優占し、ダケカンバ、ブナなどが混生している。亜高木層は高さ10m、植被率20%で、シロヤシオ、ウラジロモミ、ナツツバキなどが生育している。低木層は高さ5m、植被率30%で、シロヤシオが優占し、リュウブが混生している。草本層は高さ1.2m、植被率100%で、クマイザサが高被度で優占し、他の生育種は僅かである。<br/>③プロット内にはシロヤシオが11本確認されており、内1本は枯死していたものの、他は健全に生育している。高木層の植被率が60%、亜高木層の植被率が20%と低い状況が、林内に生育するシロヤシオ、アカヤシオの生育にとって好適な条件になっていると考えられる。<br/>④プロット内でニホンジカの痕跡(足跡、剥皮、糞、食痕)が確認された。</p> | -    | -      |
| 評価   | <新規地点につき記載なし>   | 森林調査の結果、アカヤシオ、シロヤシオを含む植物群落は健全に生育しており、保護林は良好な状態で維持されている。  | -    | -      |
| 課題   | ヤシオツツジ類の個体の生育分布状況に留意する。   | 林下にシロヤシオ・アカヤシオの生育する植物群落の継続的な保全に向け、調査プロットにおいて、上層木の変化に伴う生育状態の変化、林床における後継樹の生育状態の変化など、植物群落の動態を把握するための森林調査の継続が必要である。シカによる被害、影響にも留意する必要がある。シロヤシオ、アカヤシオは、林内生育種のため、木漏れ日の差し込む樹冠の状態が保たれていることが重要であり、森林調査においては、上層木の植被率の変化に特に留意していく必要がある。   | -    | -      |

|   |                      |  |   |   |
|---|----------------------|--|---|---|
| <b>現地調査方針、計画(案)</b>   |                      |    |  |  |
| 保護林名  | 唐沢ヤシオツツジ植物群落保護林      |  |   |   |
| 整理番号  | 067                  |  |   |   |
| 森林管理局名  | 関東森林管理局              |  |   |   |
| ① 現地調査計画  |                      |  |   |   |
| 保護林概況写真   | 調査項目                 | 森林調査   | 動物調査  | 利用動態調査  |
|  | 設定目的                 | 原生林に準ずべき森林で、学術及び森林施業上の検証として必要なもの。ブナ林下のヤシオツツジ群生地の保護を図る。設定：昭和48年4月1日(平成6年4月1日) 面積：57.08ha  |   |   |
|   | 調査箇所(選定理由)・ルート(所要時間) | 調査プロットは、林下にシロヤシオ・アカヤシオが生育する針広混交林に2地点設定されている。第2回モニタリング地点(H24年度設置)を活用する。駐車地点から調査地点まで約450～520m、徒歩20～40分程度。調査プロット1・2ともにシロヤシオの生育密度がやや低い地点に設定されているため、プロット1は生育密度の高い地点に移設する。 | —   | —   |
|   | 調査時期、回数              | 夏季、1回。   | —   | —   |
|   | 調査項目                 | 毎木調査、植生調査、定点写真撮影   | —   | —   |
| 保護林概観   | 調査方法                 | 0.1haのプロットを設定し、毎木調査では胸高直径、樹高(20本/プロット)を計測する。植生調査では、植物の種組成の概要を把握する。   |   |   |

② 総括整理表

| 項目   | 基礎情報  | 前回調査結果<br>(平成24年度記載内容)  | 本年度基礎調査結果<br>(現地概況把握調査結果)   | 調査項目                         |    |     |     |                      |       |      |      |      |   |   |                   |   |   |   |
|------|---|---|---|------------------------------|----|-----|-----|----------------------|-------|------|------|------|---|---|-------------------|---|---|---|
|      |   |   |   | 保護対象種が健全に生育し、その遺伝資源が保存されている  |    |     |     |                      |       |      |      |      |   |   |                   |   |   |   |
|      |   |   |   | ①保護対象樹種の個体数、生育密度、②希少植物の生育の有無 |    |     |     | ①動物の生息状況、②希少動物の生息の有無 |       |      |      | 利用動態 |   |   | シカ被害、外来種、周辺森林の変化他 |   |   |   |
| 毎木   | 植生  | 定点写真林内  | 植物相   | ほ乳類                          | 鳥類 | 昆虫類 | 指標種 | 希少種                  | 利用者数  | 利用実態 | 定点撮影 |      |   |   |                   |   |   |   |
| 必須   | 必須  | 必須  | 選択  | 抽出選択                         | 選択 |     |     |                      | セット選択 |      |      |      |   |   |                   |   |   |   |
| 結果概要 | <p><b>【保護林概要】</b><br/>当該保護林は、川俣国有林の山麓中部に位置する。中央部の標高は約1,500mで、北～北東向き斜面である。原生林に準ずべき森林で、ブナ林下にヤシオツツジの群生地がみられる。平成24年度のモニタリング調査時に行った概況把握では、アカヤシオ、シロヤシオの群生はブナ林下では確認されず、ウラジロモミ林下で確認された(H24モニタリング調査報告書)。</p> <p><b>【保護対象群落：ブナ林下のヤシオツツジ群落】</b></p> <p><b>【調査プロット設置状況】</b><br/>保護対象となっているヤシオツツジの生育する代表的な場所を候補地として選定した。当保護林は5ha以上500ha未満の面積であるため、可能な限り異なる植生が含まれるよう2箇所の調査プロットを設定した。調査プロット1・2ともにシロヤシオ生育範囲の縁の生育密度がやや低い地点に設定されているため、プロット1は生育密度の高い地点に移設する。</p> | <p><b>【調査プロット1：ウラジロモミ群落】(標高1,395m)</b><br/>高木層は高さ25m、胸高直径40-65cm(最大はウラジロモミ)、植被率60%で、ウラジロモミが優占し、ダケカンバ、ハウチワカエデなどが生育している。亜高木層は高さ8m、植被率60%で、シロヤシオが優占して生育し、ウラジロモミ、ダケカンバなどが混生している。低木層は高さ4m、植被率40%で、シロヤシオ、マルバマンサクなどが優占して生育している。草本層は高さ1.2m、植被率90%で、クマイザサが高被度で優占し、他の生育種は僅かである。プロット内でニホンジカの痕跡(足跡、剥皮、糞、食痕)が確認された。ウラジロモミにはシカ剥皮防止ネットがかけられている。</p> <p><b>【調査プロット2：ウラジロモミ群落】(標高1,477m)</b><br/>高木層は高さ22m、胸高直径25-60cm(最大はウラジロモミ)、植被率60%で、ウラジロモミが優占し、ダケカンバ、ブナなどが混生している。亜高木層は高さ10m、植被率20%で、シロヤシオ、ウラジロモミ、ナツツバキなどが生育している。低木層は高さ5m、植被率30%で、シロヤシオが優占し、リュウブが混生している。草本層は高さ1.2m、植被率100%で、クマイザサが高被度で優占し、他の生育種は僅かである。プロット内でニホンジカの痕跡(足跡、剥皮、糞、食痕)が確認された。</p> | <p><b>【到達状況】</b><br/>大きな変更はない。</p> <p><b>【林分概況】</b><br/>保護林はコメツガ、ウラジロモミ等の常緑針葉樹の混交比が高い林分が広い範囲を占め、ブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹が優占する林分は中心部の尾根沿いに一部見られる。ヤシオツツジ(アカヤシオ、シロヤシオ)は、保護林内の斜面上部の尾根部に広がっており、主にコメツガ林下や上層木が枯損・消失した箇所高密度で分布している。前回調査時に比べてササの減少が認められた。</p> <p><b>【調査プロットの代表性検討結果】</b><br/>前回調査のプロット1は、胸高直径40～65cm程度のウラジロモミが優占して亜高木層、低木層にシロヤシオが生育する林相で、前回調査のプロット2は、胸高直径25～60cmのウラジロモミが優占して亜高木層、低木層にシロヤシオが生育する林相である。調査プロット1・2ともにシロヤシオの生育密度がやや低い地点に設定されているため、プロット1は生育密度の高い地点に移設する。</p> <p><b>【プロット表示】</b><br/>中心杭が残っており再現可能。</p> | A                            | A  | A   | C   | —                    | —     | —    | —    | —    | — | — | —                 | — | — | A |
| 課題等  | —   | 保護林内全域を踏査した結果、ヤシオツツジ類の群生箇所は尾根筋を中心に広く確認され、ヤシオツツジ類の保護上大きな問題はないと考えられる。ただし、調査プロット1・2ともにシロヤシオの生育密度がやや低い地点に設定されているため、プロット1は生育密度の高い地点に移設する。また、ウラジロモミなどの針葉樹を中心とした上層木が枯損している。または、枯損が進行しつつある箇所が広くみられ、保護林内の斜面下部を中心にササの減少が著しい箇所が認められる。次年度の調査では、シカの被害程度を把握する調査を実施する。シカの被害については、保護林全域を対象に、代表的な地点における定点写真撮影とともに、「森林における鳥獣被害対策のためのガイド」を参照して定量的に評価を行う。   |   |                              |    |     |     |                      |       |      |      |      |   |   |                   |   |   |   |

| 既設区分    | 名称                | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称  |
|---------|-------------------|---------|--|--|---|--|
| 植物群落保護林 | 西金砂常緑広葉樹<br>にしかなさ | 14.39   | 照葉樹林帯と落葉樹林帯との中間的な要素を持った林分を保護するため設定する。また、林床植物の中には、ミヤマトベラのように北限になっているものや、ミヤマスカシユリ、フクロダガヤ等の安山岩質集塊岩地域に限りみられるものもある。 | 峰集国有林の山腹中央～下部に分布する天然生林である。保護林内には、南斜面にはシラカシ、スタジイ、カゴノキなどの常緑広葉樹、北斜面にはブナ、イヌブナ、アカシデ、クリ、オノオシカンバなどの落葉広葉樹が多い天然生林が広がっている。保護林内は、南斜面にシラカシ、ウラジロガシなどの常緑広葉樹、北斜面にブナ、イヌブナ、アカシデ、クリなどの落葉広葉樹が優占する林相にある。高木層は高さ32m、胸高直径20-120cm（最大はスギ）程度。 | 西金砂常緑広葉樹植物群落保護林は、照葉樹林帯と落葉樹林帯との中間的な要素を持った林分の保護を目的とした保護林である。②分布の北限に近いスタジイやカゴノキなどの常緑広葉樹の生育する天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br>新名称：西金砂暖温帯上部スタジイ<br>暖温帯上部に成立している常緑広葉樹林であることを強調するため、「暖温帯上部」を挿入する。 |

名称の変更

|                         |
|-------------------------|
| 希少個体群保護林<br>新名称：西金砂スタジイ |
|-------------------------|

| 既設区分    | 名称            | 面積 (ha) | 設定目的  | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称                    |
|---------|---------------|---------|---|--|---|------------------------------|
| 植物群落保護林 | 猫越暖温帯性<br>ねっこ | 11.28   | この地域では数少ない、アカガシ、ウラジロガシ、シイ、タブ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林であり、これを保護するため設定する。 | 保護林内は、胸高直径40～90cm程度のウラジロガシの高齢木が優占し、スタジイ、ツブラジイ、アカガシ、タブノキなどの常緑高木の同齢木が混生する林となっている。ニホンジカによる林床植生の食害が著しい。前回調査時も指摘されていたが、食害はさらに進行し、裸地化、エロージョンが進行するに至っている。 | 猫越暖温帯性植物群落保護林は、照葉樹林帯の上限に位置し、ウラジロガシの優占する天然林の保護を目的とした保護林である。分布の上限で大径木のウラジロガシの優占する天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br>新名称：猫越暖温帯性ウラジロガシ |

名称の変更  
樹種名を標準和名に統一  
鳥獣害対策の検討

|   |  |   |                          |
|---|--|---|--------------------------|
| この地域では数少ない、アカガシ、ウラジロガシ、スタジイ、タブノキ等の常緑広葉樹を主とした暖温帯の天然林であり、これを保護するため設定する。 | 保護林内は、胸高直径40～90cm程度のウラジロガシの高齢木が優占し、スタジイ、アカガシ、タブノキなどの常緑高木の同齢木が混生する林となっている。ニホンジカによる林床植生の食害が著しい。前回調査時も指摘されていたが、食害はさらに進行し、裸地化、エロージョンが進行するに至っている。 | 猫越暖温帯性植物群落保護林は、照葉樹林帯の上限に位置し、ウラジロガシの優占する天然林の保護を目的とした保護林である。分布の上限で大径木のウラジロガシの優占する天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。<br>■今後の検討課題：①鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。 | 希少個体群保護林<br>新名称：猫越ウラジロガシ |
|---|--|---|--------------------------|

| 既設区分    | 名称                   | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称  |
|---------|----------------------|---------|--|--|---|--|
| 植物群落保護林 | 富士山六番低山帯<br>ふじさんろくばん | 6.17    | 標高1,000m～1,100mの富士山の低山帯植生を代表するブナ、カエデ等落葉広葉樹と主とする天然林で、富士山の植物の垂直分布を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。 | 保護林内は、胸高直径35～100cm程度の老齢のブナ・ケヤキと、カエデ類であるメクスリノキ、オオモミジ、オニイタヤなどが混在して生育し、ブナとカエデ類が混在した混交群落形成されている。シカの食害により下層植生は少ない。保護林内にシカ柵（10×10m程度）が5箇所ほど設置されている。柵内の植生は回復傾向にある。柵の内外で植生調査を行い、シカによる植生への影響を調べることができる。シカ柵はプラスチック繊維のネットで、ファスナーの出入り口があり、中へは簡単に入れる。 | 富士山六番低山帯植物群落保護林は、標高1,000m～1,100mの富士山の低山帯植生を代表するブナ、カエデ等落葉広葉樹と主とする天然林の保護を目的とした保護林である。②暖温帯上部に残存し、ブナが混在する天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br>新名称：富士山六番低山帯ブナ<br>低山帯に遺存して生育するブナであることを強調するため、「低山帯」を挿入する。 |

名称の変更  
鳥獣害対策の検討

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 富士山六番低山帯植物群落保護林は、標高1,000m～1,100mの富士山の低山帯植生を代表するブナ、カエデ等落葉広葉樹と主とする天然林の保護を目的とした保護林である。②暖温帯上部に残存し、ブナが混在する天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。<br>■今後の検討課題：①鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。 | 希少個体群保護林<br>新名称：富士山六番ブナ |
|---|-------------------------|

| 既設区分    | 名称               | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称  |
|---------|------------------|---------|--|---|--|--|
| 植物群落保護林 | 八溝山冷温帯性<br>やみぞさん | 29.49   | 県下随一の温帯性落葉広葉樹林を保護するため設定した。また、茨城県内では唯一ここでしか見られないダケカンバの群落がある。阿武隈山地に分布しているオヤリハグマの南限であり、八溝山はツガの北限になっている。 | 八溝国有林の山腹上部～中央部に分布する天然生林である。保護林内には、ブナ、ミズナラ、カエデ類、シデ類の天然生林が広がっている。保護林内は、ブナ、ミズナラ等が優占する林相にある。高木層は高さ23m、胸高直径20-90cm（最大はブナ）程度。また、ダケカンバについては、南側の尾根に小径木の個体が僅かながら生育している状況にあることが確認されている。 | 八溝山冷温帯性植物群落保護林は、北限のツガ、茨城県内唯一のダケカンバを含む、ブナ、ミズナラ、カエデ類、シデ類の天然林の保護を目的とした保護林である。②分布北限のツガ、①②県内唯一のダケカンバを含む天然林を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br>新名称：八溝山冷温帯ツガ・ダケカンバ<br>冷温帯に生育するツガ、ダケカンバであることを強調するため、「冷温帯」を挿入する。 |

名称の変更

|                             |
|-----------------------------|
| 希少個体群保護林<br>新名称：八溝山ツガ・ダケカンバ |
|-----------------------------|

資料 3-3. 鳥獣害対策の検討を追加

| 既設区分    | 名称              | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称             |
|---------|-----------------|---------|--|--|---|-----------------------|
| 植物群落保護林 | 西丹沢ブナ<br>にしたんざわ | 225.10  | ブナを主とした原生状態を維持している高齢の天然林で、この地方では珍しく貴重でありこれを保護するため設定する。 | 保護林内は、胸高直径50~90cmの高齢級のブナが優占し、林床に生育するスズクモ現段階では比較的繁茂している。ただし、シカによる食害のため、低木層以下の植生は衰退の傾向にある。また、気象害の発生もあり、主木をなすブナの倒木や枯損も進行している。今後、このような状態が進行すれば、ブナ群落の更新が進まない状況が懸念される。 | 西丹沢ブナ植物群落保護林は、ブナを主とした原生状態を維持している高齢の天然林の保護を目的とした保護林である。①②太平洋側地域に分布する希少なブナ群落を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br>新名称：西丹沢ブナ |

鳥獣害対策の検討

西丹沢ブナ植物群落保護林は、ブナを主とした原生状態を維持している高齢の天然林の保護を目的とした保護林である。①②太平洋側地域に分布する希少なブナ群落を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。

■今後の検討課題：①鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。

| 既設区分    | 名称              | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称             |
|---------|-----------------|---------|--|---|---|-----------------------|
| 植物群落保護林 | 西丹沢モミ<br>にしたんだわ | 50.31   | モミを主とした原生状態を維持している高齢の天然林で、この地方では珍しく貴重でありこれを保護するため設定する。 | 保護林内は、胸高直径40~80cmの高齢級のブナが優占し、保護対象種であるモミは、胸高直径30~70cm程度の個体が散在している。前回調査として比較して、高木層、亜高木層、低木層に変化はないが、草本層に生育するスズクモは継続して食圧に晒されており、スズクモはさらに衰退している。シカ糞や食痕も多数見られる。保護対象樹種であるモミは、高木、亜高木のほか、生育量は少ないものの、低木、稚樹・実生の生育も認められる。 | 西丹沢モミ植物群落保護林は、ブナを主とした原生状態を維持している高齢の天然林の保護を目的とした保護林である。①②太平洋側地域に分布する、モミの散在した希少なブナ群落を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br>新名称：西丹沢モミ |

鳥獣害対策の検討

西丹沢モミ植物群落保護林は、ブナを主とした原生状態を維持している高齢の天然林の保護を目的とした保護林である。①②太平洋側地域に分布する、モミの散在した希少なブナ群落を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。

■今後の検討課題：①鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。

| 既設区分    | 名称                    | 面積 (ha) | 設定目的  | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称                   |
|---------|-----------------------|---------|---|---|--|-----------------------------|
| 植物群落保護林 | 富士山崩塚亜高山帯<br>ふじさんとやづか | 4.84    | 標高1,500m~1,600mの富士山の亜高山帯植生を代表するウラジロモミ、ハリモミ等の針葉樹にブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹が混交する天然林で、富士山の垂直分布を知る上で貴重であり、これを保護するため設定する。 | 本保護林は、富士山の西側にあり、標高1,500~1,600mに位置する。ハリモミ、ウラジロモミ等の針葉樹にブナ、ミズナラ、シナノキ、サウグルミ、オオイタヤメイゲツ等の落葉広葉樹が混生する天然林である。旧噴火口の頂上部に設定された保護林で、噴火口の外輪付近から外側では、胸高直径70~90cm程度のウラジロモミが混生して優占している。スズクモへのシカ被害は、前回調査時と同じく、ほとんど葉が残ってなく裸のみの状態にある。その裸も前回調査時よりも減っている。保護林外の噴火口外側斜面部にはスズクモが密度濃く見られるが、それらもすべて裸のみで、今後、土壤浸食が進む恐れがあると考えられる。 | 富士山崩塚亜高山帯植物群落保護林は、標高1,500m~1,600mの富士山の亜高山帯植生を代表するウラジロモミ、ハリモミ等の針葉樹にブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹が混交する天然林の保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、⑤旧噴火口（寄生火山）といった特殊な立地に成立している亜高山帯植生を保護対象としていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br>新名称：富士山崩塚ウラジロモミ |

鳥獣害対策の検討

富士山崩塚亜高山帯植物群落保護林は、標高1,500m~1,600mの富士山の亜高山帯植生を代表するウラジロモミ、ハリモミ等の針葉樹にブナ、ミズナラ等の落葉広葉樹が混交する天然林の保護を目的とした保護林である。5ha以上の面積要件は満たしていないが、⑤旧噴火口（寄生火山）といった特殊な立地に成立している亜高山帯植生を保護対象としていることから、希少個体群保護林とする。

■今後の検討課題：①保護林区域の検討。寄生火山の山麓部も含む保護林の外周部に接して分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。

資料 3-4. その他の修正箇所

| 既設区分      | 名称                               | 面積 (ha) | 設定目的   | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称                  |
|-----------|----------------------------------|---------|--|---|--|----------------------------|
| 森林生態系保護地域 | 南アルプス南部光岳<br>みなみあるぶすなんぶてかり<br>だけ | 3055.35 | 南アルプス最南端に位置し、光岳を始め中ノ尾根山等2,000mを超える一帯は、本州中部の太平洋側における山地帯から高山帯に至る典型的な垂直分布が残されている。この原生林地帯は原生自然環境保全地域に指定されている等、森林生態系保護地域として後世に伝えていくにふさわしい森林であるため設定する。 | この地域は、2,000mを超える山々が連なる一帯で、本州中部の太平洋側における山地帯から高山帯に至る典型的な森林の垂直分布が残されている。標高1,700m付近までの区域は、沢筋から山腹にかけてはブナ、ミズナラ、サウグルミ、シオジ、カエデ類等の落葉広葉樹林、尾根付近ではウラジロモミ、コメツガ、ネスコ等の針葉樹林となっている。標高1,700m付近から上部は、コメツガを主体にウラジロモミ、トウヒ等の針葉樹林となっている。 | 南アルプス南部光岳森林生態系保護地域は、我が国の気候帯または森林帯を代表する原生的な天然林として、これまで森林生態系保護地域として設定してきた区域である。面積要件2,000haも確保されており、引き続き、森林生態系保護地域とする。また、同種の植生を有し、隣接している「白倉林木遺伝資源保存林」と「中ノ尾根山の森林植物群落保護林」は、一体的に管理することが妥当と考えられるため、森林生態系保護地域に組み込むこととする。<br><br>■今後の検討課題：①鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。 | 森林生態系保護地域<br>新名称：南アルプス南部光岳 |
| 林木遺伝資源保存林 | 白倉<br>しろくら                       | 55.23   | 亜高山帯性植物のモミ、シラベ、コメツガ、トウヒ等の遺伝資源の保存を目的に設定する。原生状態を保ったこの地方の代表的な天然林である。  | トウヒ、コメツガ等を主とした原生状態を保っている群落。保護林内は、コメツガ・トウヒ（胸高直径30～70cm）の優占する林が広がっている。尾根に沿ってニホンジカによる食害が多くみられ、特に高標高地の傾斜のゆるい尾根で、スタケの食害や針葉樹の樹皮剥ぎが多くみられる。   |  |                            |
| 植物群落保護林   | 中ノ尾根山の森林<br>なかのおねやまのしんりん         | 137.41  | 原生状態を保った代表的な天然林で、山地帯・亜高山帯・高山帯の森林植生の推移等が観察でき学術上貴重であり、これを保護するため設定する。   | モミ、ツガ、トウヒ、シラベ、ミズメ、ダケカンバ等の天然生林。保護林内はコメツガ・トウヒ（胸高直径30～70cm）の優占する林が広がっている。尾根に沿ってニホンジカによる食害が多くみられ、特に高標高地の傾斜のゆるい尾根で、スタケの食害や針葉樹の樹皮剥ぎが多くみられる。   |  |                            |

樹種名を標準和名へ統一

|  |  |
|--|--|
| <p>亜高山帯性植物のモミ、<b>シラビソ</b>、コメツガ、トウヒ等の遺伝資源の保存を目的に設定する。原生状態を保ったこの地方の代表的な天然林である。</p> | <p>モミ、ツガ、トウヒ、<b>シラビソ</b>、ミズメ、ダケカンバ等の天然生林。保護林内はコメツガ・トウヒ（胸高直径30～70cm）の優占する林が広がっている。尾根に沿ってニホンジカによる食害が多くみられ、特に高標高地の傾斜のゆるい尾根で、スタケの食害や針葉樹の樹皮剥ぎが多くみられる。</p> |
|--|--|

| 既設区分        | 名称                | 面積 (ha)  | 設定目的  | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討  | 新区分および新名称           |
|-------------|-------------------|----------|---|---|---|---------------------|
| 森林生物遺伝資源保存林 | 秩父山地<br>ちちぶさんち    | 2,122.86 | 標高1,120～2,480mに位置し、ブナ、カンバ類、カエデ類等の広葉樹やコメツガ、シラビソ等の針葉樹等から構成される多様な森林植生を有しており、自然状態が良く保たれた太平洋気候区の典型的な森林である。このため森林と一体となって自然生態系を構成する生物遺伝資源を自然生態系内に安定的、恒久的に保存することとし、将来の遺伝資源利用等に役立つつ、これらの森林を後世に引き継ぐものとして設定する。 | 山地帯にはコメツガ、ウラジロモミ等の常緑針葉樹を主体に分布し、沢筋等の湿潤な立地ではミズナラ等の落葉広葉樹が見られる。亜高山帯にはシラビソ、ダケカンバ等が分布する。また、十文字峠、甲武信ヶ岳等、亜高山帯に高山性植生が成立している。 | 秩父山地森林生物遺伝資源保存林は、標高1,120～2,480mに位置し、ブナ、カンバ類、カエデ類等の広葉樹やコメツガ、シラビソ等の針葉樹等から構成される多様な森林植生を有した、自然状態が良く保たれた太平洋気候区の典型的な森林である。このように、本生物遺伝資源保存林は、自然状態が十分保存された天然林を主体とした、地域固有の生物群集がまとまりを持って存在する区域で、300ha以上の面積要件を満たしていることから、生物群集保護林とする。また、同種の植生を有し、隣接する「十文字峠植物群落保護林」は、一体的に管理することが妥当と考えられるため、生物群集保護林に組み込むこととする。<br><br>■今後の検討課題：①地帯区分の検討。保存地区は、稜線上の風衝地、赤沢岳石灰岩地、十文字峠、甲武信ヶ岳等、亜高山帯に高山性植生が成立している区域。②鳥獣害対策の検討。シカの食害を受けている林床植生の回復。 | 生物群集保護林<br>新名称：秩父山地 |
| 植物群落保護林     | 十文字峠<br>じゅうもんじとうげ | 22.6     | コメツガ、シラベ、トウヒ等の常緑針葉樹を主とする亜高山帯の天然林で、林相は極相を示し、原生状態を示す貴重な森林として設定する。   | コメツガ林、シラビソ・オシラビソ群集からなる保護林である。ニホンジカの生息密度が高いため、生息状況調査と対策の検討が必要（生息密度管理対策）。   |   |                     |

樹種名を標準和名へ統一

|  |
|--|
| <p>コメツガ、<b>シラビソ</b>、トウヒ等の常緑針葉樹を主とする亜高山帯の天然林で、林相は極相を示し、原生状態を示す貴重な森林として設定する。</p> |
|--|

| 既設区分      | 名称            | 面積 (ha) | 設定目的 | 植生概況  | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称                        |
|-----------|---------------|---------|------|---|--|----------------------------------|
| 林木遺伝資源保存林 | コガネ沢<br>こがねさわ | 28.21   |      | ツガやモミなどの針葉樹林が広がっており、針葉樹に混ざってフナやイヌブナなどの落葉広葉樹が混生している林相。高木層は高さ34m、胸高直径12-117cm（最大はモミ）、植被率90%で、モミが優占し、ツガ、イヌブナ、ブナなどが混生している。保護林の設定目的と比較して、ツガ・モミなどの針葉樹が優占する林相にあり、保存対象種のフナ、イヌブナなどの生育量は少ない状況にある。 | コガネ沢林木遺伝資源保存林は、フナ、イヌブナ、キハダ等の遺伝資源の保存を目的とした保護林である。①原生状態を保ったこの地域の代表的な天然林を構成する個体群、④遺伝資源の保護を目的とする個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。 | 希少個体群保護林<br>新名称：コガネ沢フナ・イヌブナ 遺伝資源 |

標高の加筆

↓

本保護林は、地頭方国有林の標高1,000m~1,300mの山頂下部急斜面に成立する天然生林である。ツガやモミなどの針葉樹林が広がっており、針葉樹に混ざってフナやイヌブナなどの落葉広葉樹が混生している林相にある。高木層は高さ34m、胸高直径12-117cm（最大はモミ）、植被率90%で、モミが優占し、ツガ、イヌブナ、ブナなどが混生している。保護林の設定目的と比較して、ツガ・モミなどの針葉樹が優占する林相にあり、保存対象種のフナ、イヌブナなどの生育量は少ない状況にある。

| 既設区分      | 名称                  | 面積 (ha) | 設定目的                    | 植生概況   | 保護林の再編に関する検討   | 新区分および新名称                     |
|-----------|---------------------|---------|-------------------------|--|--|-------------------------------|
| 林木遺伝資源保存林 | 竜頭の滝カラマツ<br>りゅうずのたき | 12.98   | 天然カラマツの遺伝資源を保存するため設定する。 | 保護林内はミスナラが優占する林分。カラマツの生育はほとんど見られない。保護林の隣接地にはカラマツ林が存在している。高木層は高さ26m、胸高直径15-98cm（最大はカラマツ）程度。 | 竜頭の滝カラマツ林木遺伝資源保存林は、カラマツの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。④遺伝資源の保存を目的とした個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。<br><br>■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の北側に隣接する区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する。 | 希少個体群保護林<br>新名称：竜頭の滝カラマツ 遺伝資源 |

周辺は国有林

↓

竜頭の滝カラマツ林木遺伝資源保存林は、カラマツの遺伝資源の保存を目的とした保護林である。④遺伝資源の保存を目的とした個体群を保護対象としていること、5ha以上の面積要件を満たしていることから、希少個体群保護林とする。  
  
■今後の検討課題：①保護林区域の検討。保護林の北側に隣接する区域に分布している同様な林相にある林分の一体的な保全の必要性を検討する（一体的な保全を検討する林分は、現状、自然維持タイプの国有林）。